建 築 工 学 科

学 習 の 手 引

令和２年４月

日本大学生産工学部

目次

Ⅰ. 建築工学科について 1
カリキュラムマップ 3

■ 建築総合コース 8
1. カリキュラム構成と履修条件
2. 教養科目・基盤科目の学び方
3. 設計科目の学び方
4. 情報系科目の学び方
5. 実験科目の学び方
6. ゼミナール
7. 卒業研究

■ 建築デザインコース 13
1. 建築デザインコースの特徴・教育
2. 建築デザインコースの先へ
3. ゼミナールと卒業研究・卒業設計
4. さらなるメッセージ
5. 授業風景・成果

■ 居住空間デザインコース 18
1. 居住空間デザインコースで学ぶこと
2. 学習目標「眼を養い、手を練れ」
3. 教育環境
4. 授業科目について
5. ゼミナールと卒業研究
6. 卒業後の進路

■ 生産工学系科目（各コース共通） 23
■ 他コース設置科目の受講について 25
■ 転コースについて 25

Ⅱ. 大学院について 26
Ⅲ. 建築関係の図書蔵書紹介 27
Ⅳ. 就職 28
Ⅴ. 卒業後の資格 31
Ⅵ. カウンセリング 34
Ⅶ. 建築工学科の研究室および施設案内 35
Ⅷ. 建築工学科教職員の紹介 41

Ⅰ．建築工学科について

建築工学科の教育目標

我々には限られた資源の節約と豊かな生活を両立させ、快適な空間と美しい自然を共存させる義務が課せられています。建築という学問は、人間の生活環境を創造する分野であり、それは家具・住宅から都市空間にとどまらず、それを実現するための建設技術と精神に潤いを与える社会科学・人文科学・芸術学を加えた人文領域から成り立っています。これから建築を学んでいく人たちは、そうした分野を総合的に、しかも学際的に習得していかなければなりません。

これからの時代は、普段何気なく暮らしている人達にも、建築に対する知識が求められます。豊かな生活環境は建築専門家のみが造るものではないからです。ならば将来、建築の仕事に携わることを考えている人達は、いっそう建築の専門知識と工学技術を身につけなければ専門家としての役割は果たせません。

こうした社会の要請に応えるために、生産工学部建築工学科カリキュラムでは、国家資格である一級建築士受験の要件となる科目を網羅しています注)。そして創造的に新しい価値を生み出す発想力・応用力・対話力を養成し、課題解決能力を備えた人材を育成していくことを教育の最大目標に掲げています。

注）別途配布する一級建築士受験指定科目一覧を参照の上履修してください。

3 つのコース

建築工学科のカリキュラムは、先ず学生の学習意欲を引き出し、学習効果をあげることに重点をおいています。学生がなんらかの能動的な関わりをする授業を展開するために以下の 3 つのコースを設置しています。

・建築総合コース
・建築デザインコース
・居住空間デザインコース

いずれのコースも入学時から建築に対する学習意欲を高めるための導入科目があり、さらに建築に関する基礎的な学科目を習得し、発展的に専門教育の指導が受けられるような配慮をしています。

各コースとも、応用能力、創造力、発表・対話能力を育成するために、実験科目、実習科目、演習科目に重点をおき、少人数による学生と教員との触れ合いを大切にした教育・指導をしています。ここではお互いが建築という共通の関心事のもとで、確かめ合い、討論し、学びます。グループワーク、フィールドワーク、プレゼンテーション等を加えたアクティブラーニングです。

コースに所属するための振り分けの時期はコースにより異なります。居住空間デザインコース（女子のみ 30 名）は 1 年次入学時に希望調査及び適性審査により振り分けます。建築デザインコースは定員 30 名で 2 年次からの所属となります。希望者が定員を超える場合は「１．希望調査、２．適性検査、３．1 年次の成績」を基本とし選抜することになります。建築総合コースでは、約 20 人を単位とした班編成で設計や実験のグループ指導を行います。

各コースの履修については、別に記載されていますのでそちらを参照下さい。

各コース共通の生産実習およびゼミナール A・B については別途履修条件が設定される場合があります。

大学院へのすすめ

卒業論文・卒業設計を成し遂げた学生で、より高度な専門分野について深く研究し学びたい人のためには、大学院があります。学部 1 年次から大学院博士後期課程までのカリキュラムが構築されています。

大学院は博士前期課程（2 年間）、博士後期課程（3 年間）となっており、研究を継続的に行う事が出来ます。前期課程を修了し修士論文審査に合格すると「修士（工学）：Master of Engineering」の学位を、後期課程を修了し博士論文の審査に合格すると「博士（工学）：Doctor of Engineering」の学位を取得することとなります。

建築の学び方

① 好きこそ物の上手なれ

建築に関心を持ち興味を持つこと、建築を好きになることが建築を学ぶ始まりです。

建築に関心があるから建築工学科に入学されたのでしょう。その関心は興味に変わっていきます。それにはたくさんの興味深い建築世界の出来事に出会わなければなりません。興味が湧くとそれについてもっと知りたくなります。そこで学習をします。中途で嫌いになって挫折することもありますが、大変な思いをして何かを学び取ると、達成感に浸れます。そしてそれが好きになります。このようにして建築大好き人間になることが第一の目標です。

ある分野のプロになるためには、高度な専門知識・技術・情報を忍耐強く学習・習得する事が必要です。建築のプロになるためには、建築を学ぶ大変さを克服しななければなりません。その大変さが面白くなるということが、建築を「好きになる」ということです

② よく見る、よく聞く、よく考える

「建築」という山を登るには、いくつものルートがあります。好きな教養科目を選択して、その知識を持って専門科目を履修することで、より建築の理解が深まることがあります。建築は人間生活の器ですから、建築物を造る側からだけではなく、使う側、発注する側、管理する側からも見ることができるのです。

カリキュラムでは導入的な専門科目が用意されています。建築の専門用語や、建築が出来るまでの工程などを学びます。専門知識を持って建築に接すると、これまでとは違った見方ができてきます。また専門家の卵という意識が芽生えてきます。

ある建築や都市が実現するには、背景となった時代、その時代の風土、社会、環境、用途、様式、構造、構法、材料などさまざまな条件が必要となります。これらの条件を「分析的に観る（観察する）」ことが「専門的な観点から建築を観る（観察する）」ために必要です。そして見聞したことの意味を考え、建築を評価する自分の視点を築いていく作業が始まります。日常見慣れている光景も、見る人の思考いかんによっては、重大な真理や法則を発見する可能性を持っています。

建築を造ることは、人間の営みの場をデザインし更新していくことです。建築とは日常生活の中から何か見つけ出し、それを評価してさらにフォームをリファインし、現代の空間に写し取り定着させる行為でもあります。

③ 基礎固め

建築は一つの専門分野ですが、幅広く多様にそして高度に展開できるのが建築の世界です。

しかしその基礎と言えば、計画/構造/材料・施工/環境・設備であることに変わりはありません。これらの分野の基礎知識の上にさまざまな展開が可能となるわけです。この基礎的学科目は必修科目として設置されています。まずはこれらの科目を習得してから次のステップに進んで下さい。設計課題も１年生から４年生まで設置していますが、学年順に制覇していってください。しっかりした基礎が必要なのは建物も学問も同様です。

④ 自主創造

建築するには、建築学の専門知識と技術に加え、建築生産の工程を総括するオーガナイザー、さらには各専門技術を統括するプロジェクトマネジャーとしての能力が必要です。各教科目で学んだ知識を再構成し、「統合」しなければ建築にはなりません。

また、建築は生活文化や美的な価値を創造しなければ、優れた建築や、美しくかつ快適な都市にはなりません。

このような能力は、他者から与えられるものではありません。各自が努力をして体得していくものです。

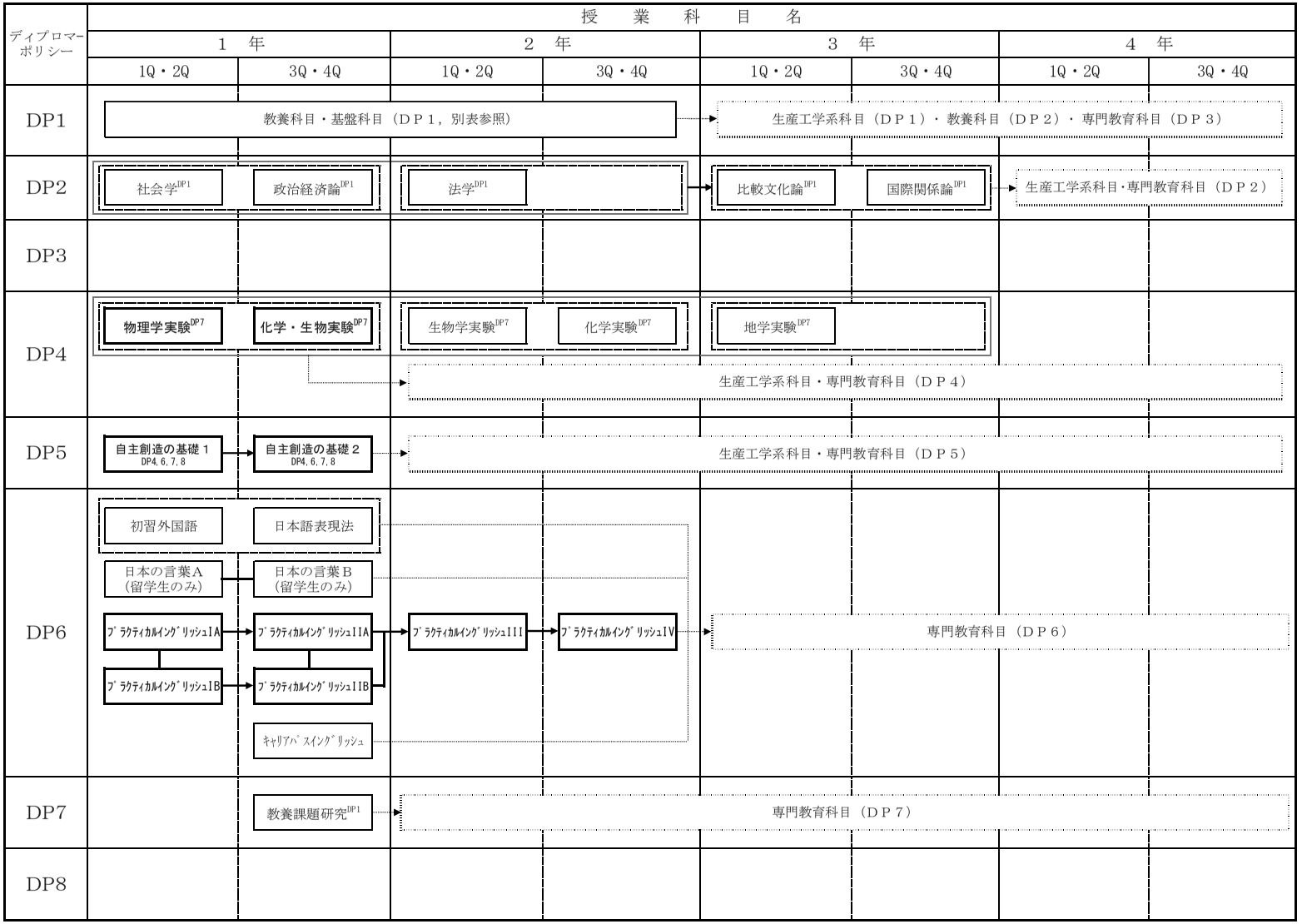
まさしく日本大学が掲げる自主創造の精神が必要です。学校のカリキュラムは、各自の自主的な創造行為のための索引に過ぎないのかもしれません。学ぶことのできる科目は、建築工学科のみならず、生産工学部の他学科、日本大学の他学部に及んでいます。街にでれば幾多の名建築があります。これらを取捨選択し学んでいく卒業までの学習履歴は、オンリーワンの履歴となります。

カリキュラム・ツリーについて

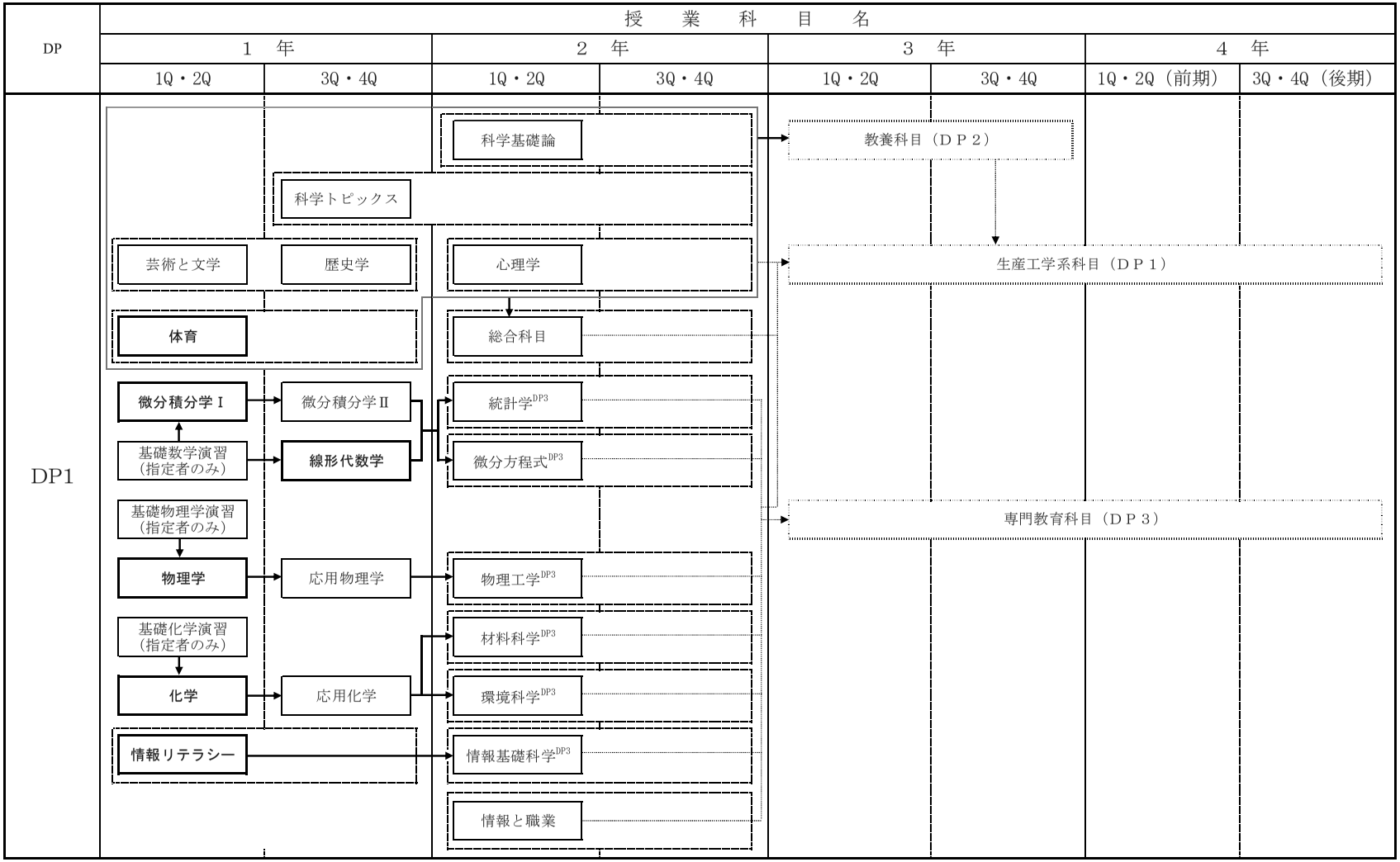
カリキュラム・ツリーは，学習到達目標の達成に向けて，どのような授業科目が連携して年次配当されているかを示したものです。基本的には設置学年にしたがって順に基礎から応用へと受講できるようになっています。機械工学科では，「日本大学教育憲章」に基づく卒業の認定に関する方針として示された8つの能力を養成するために，全学共通初年次教育科目，教養科目，基盤科目，生産工学系科目，専門教育科目の授業科目を各能力に当てはめて体系化しています。また，講義・演習・実験・実習等の授業形態を組み入れた多様な学修方法による教育課程を編成して実施しています。学習効果の向上を意識して系統的に受講してください。
※「日本大学教育憲章」および生産工学部の「卒業の認定に関する方針」・「教育課程の編成及び実施に関する方針」は，キャンパスガイドのp7を参照してください。

日本大学教育憲章			機械工学科における卒業の認定に関する方針（ディプロマ・ポリシー：DP）		機械工学科における教育課程の編成及び実施に関する方針（カリキュラム・ポリシー：CP）	
	構成要素	能力（日本大学で身に付ける力）				
自主創造	自ら学ぶ	豊かな知識・教養に基づく高い倫理観	DP1	豊かな教養と自然科学・社会科学に関する基礎知識に基づき，機械工学分野に関わる技術者としての倫理観を高めることができる。	CP1	教養科目・基盤科目・生産工学系科目等を通じて培われた教養・知識・社会性に基づき，機械工学分野に関わる技術者として倫理的に判断する能力を育成する。
		世界の現状を理解し，説明する力	DP2	国際的視点から，機械工学の観点に基づいて必要な情報を収集・分析し，自らの考えを説明することができる。	CP2	教養科目・生産工学系科目等を通じて，国際的視点から機械工学の観点に基づいて必要な情報を収集・分析し，自らの考えを効果的に説明する能力を育成する。
	自ら考える	論理的・批判的思考力	DP3	機械工学を体系的に理解して得られる情報に基づき，論理的な思考・批判的な思考をすることができる。	CP3	機械工学における体系化された専門教育科目から得られる専門知識に基づき，論理的かつ批判的に思考する能力を育成する。
		問題発見・解決力	DP4	生産工学および機械工学に関する視点から，新たな問題を発見し，解決策をデザインすることができる。	CP4	初年次より適切に配置した基盤科目や機械工学に関する実技科目等を通じて培われた機械工学分野の技術を活用して，新たな問題を発見し，解決策をデザインする能力を育成する。
	自ら道をひらく	挑戦力	DP5	生産工学の視点から，適切な目標と手段を見定め，新たなことにも挑戦し，やり抜くことができる。	CP5	生産実習を中核に据える生産工学系科目等を通じて培われた生産工学の基礎知識と経営管理を含む管理能力に基づき，新しいことに果敢に挑戦する力を育成する。
		コミュニケーション力	DP6	多様な考えを受入れ，適切な手段で自らの考えを伝えて相互に理解することができる。	CP6	コミュニケーション能力を裏付ける教養科目・基盤科目・実技科目等を通じて，多様な考えを受け入れ，違いを明確にしたうえで議論し，自らの考えを伝える能力を育成する。
		リーダーシップ・協働力	DP7	チームの一員として目的・目標を他者と共有し，達成に向けて働きかけながら，協働することができる。	CP7	基盤科目や機械工学に関する実験・実習・演習科目，ゼミナール，卒業研究を通じて，新たな課題を解決するために自ら学び，自らの意思と役割を持って他者と協働する能力を育成する。
		省察力	DP8	経験を主観的・客観的に振り返り，気付きを学びに変えて継続的に自己を高めることができる。	CP8	基盤科目の初年次教育及び生産工学系科目のキャリア教育に関連する科目を通じて，自己を知り，振り返ることで継続的に自己を高める力を育成する。

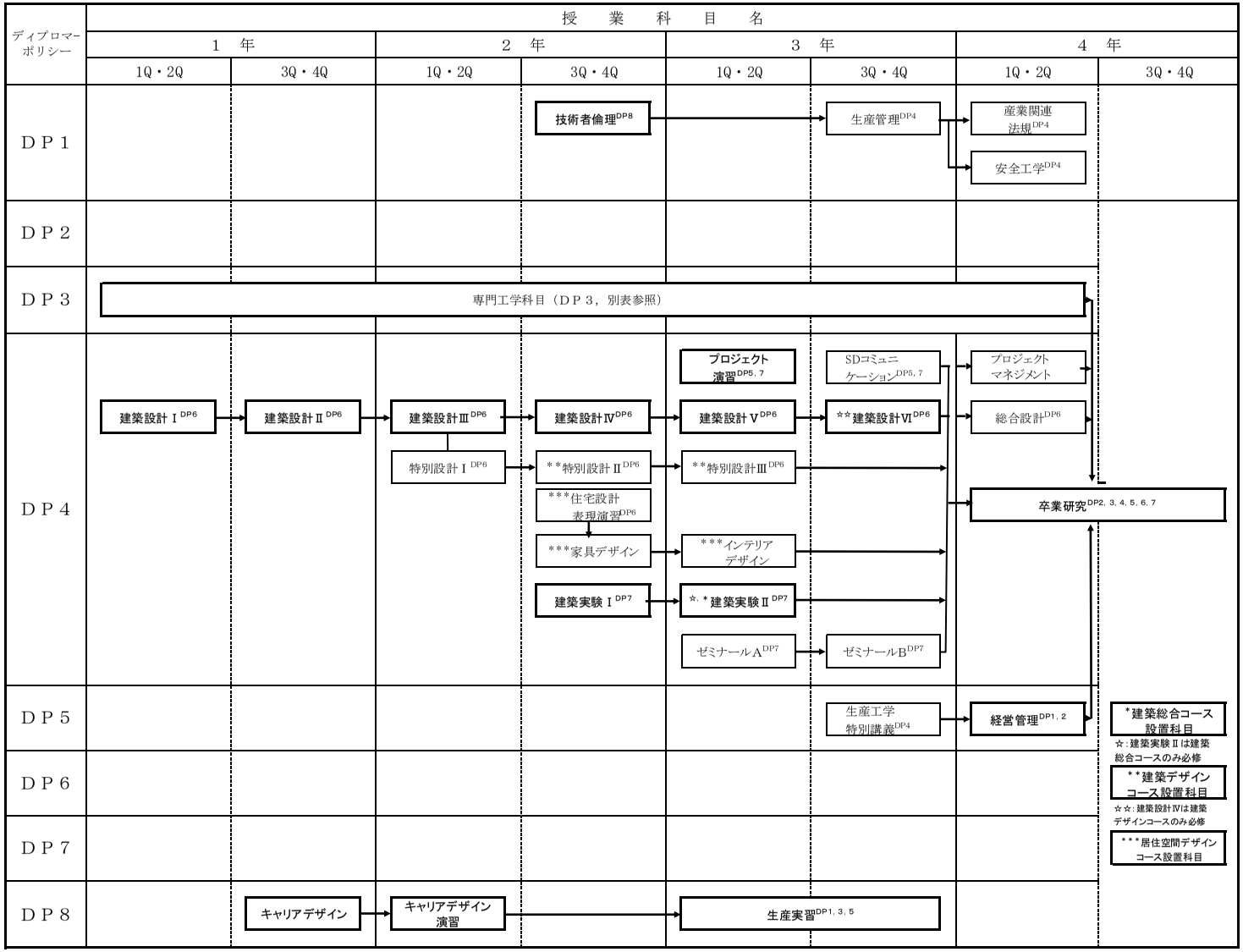
ディプロマ・ポリシーを達成するために必要な授業科目の流れ（教養科目・基盤科目）



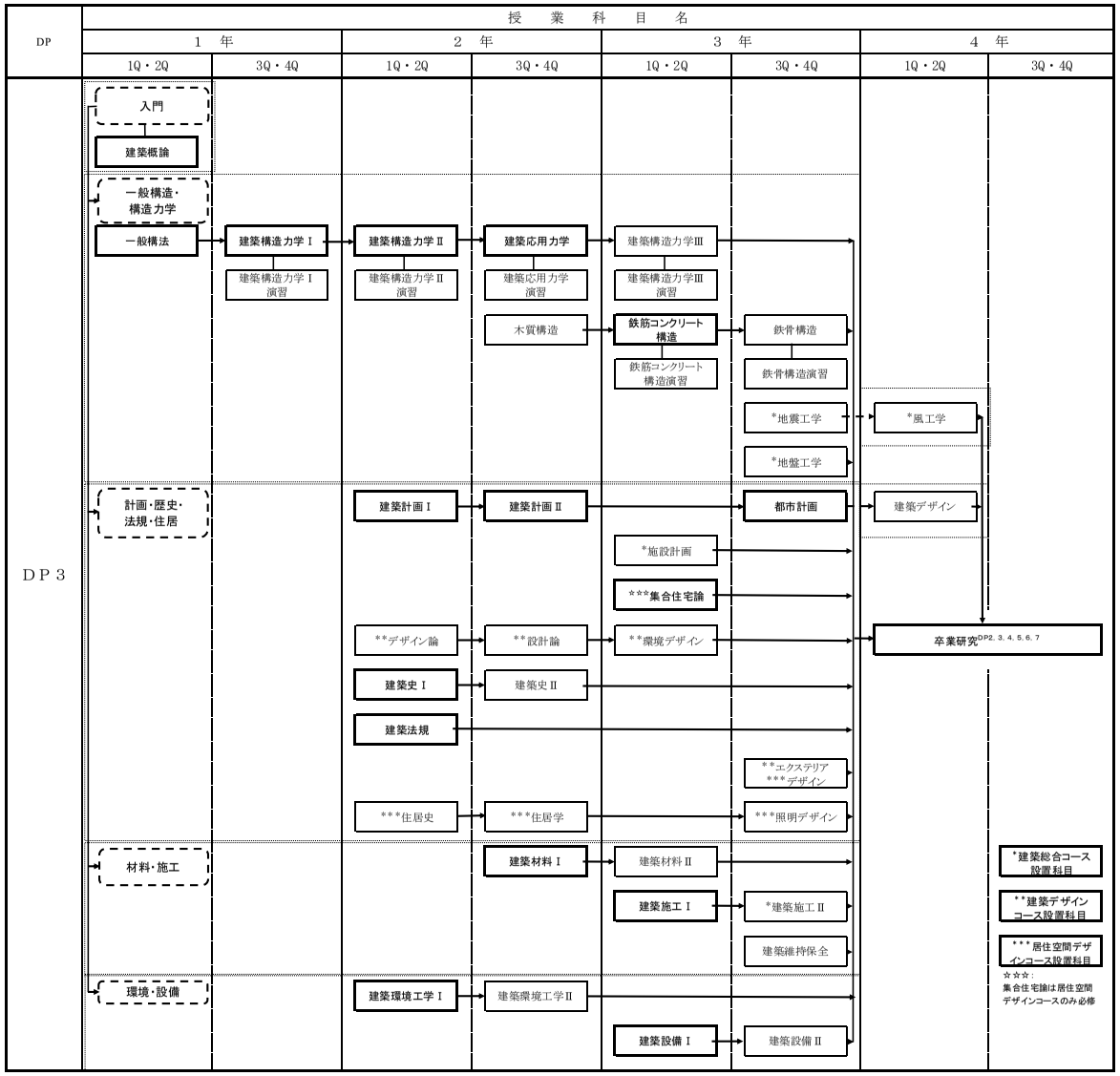
DP1を達成するために必要な授業科目の流れ



ディプロマ・ポリシーを達成するために必要な授業科目の流れ

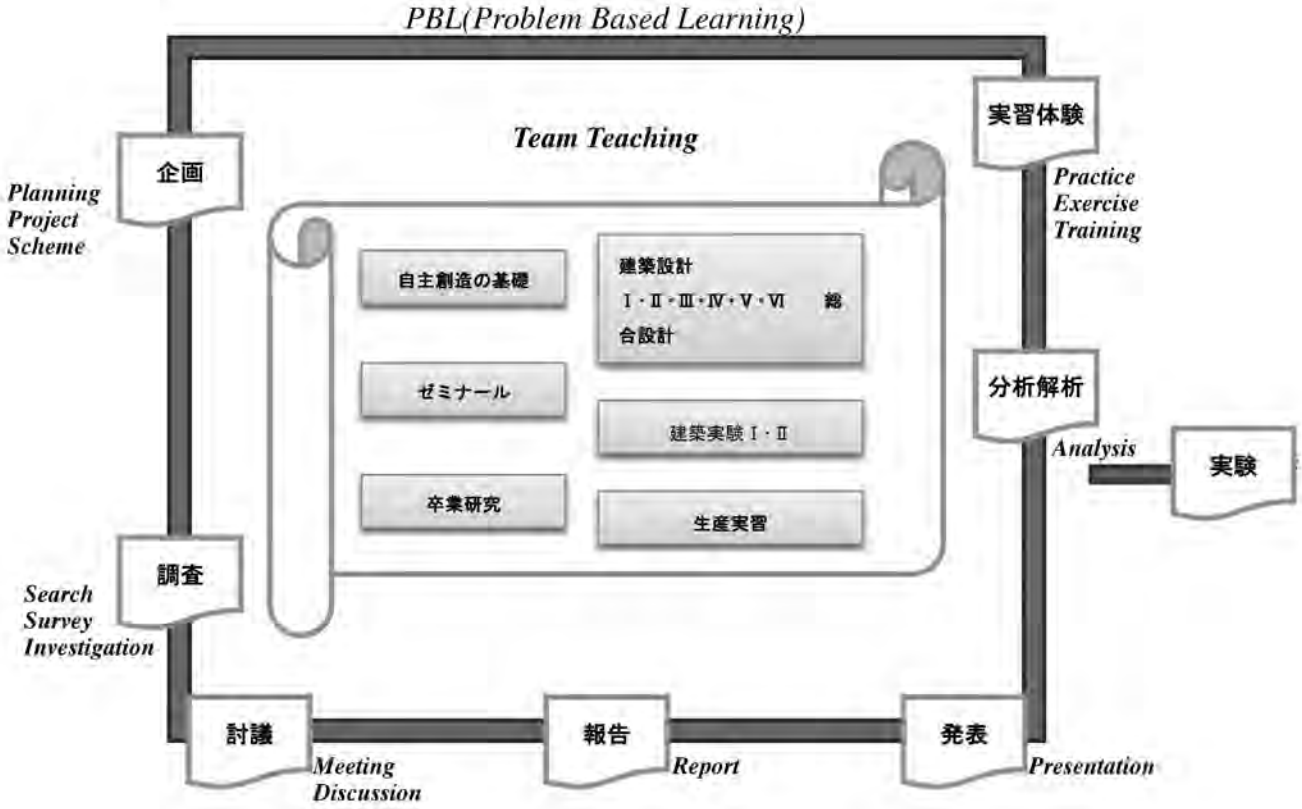


DP3を達成するために必要な授業科目の流れ



■ 建築総合コース

1. カリキュラム構成と履修条件



学生が建築にかかわる課題を自ら見出し、その課題解決策を追求する過程を通して、
設計から施工までの一貫した総合教育プログラムにより、実践能力を育成することを目指します。

実体験や模擬練習を通して建築を学び取るために、住宅・地域施設・街づくりなどを課題にし、
関連科目の知識を総合するプロジェクトが各授業を横断して組み込まれています。

これが *PBL 法*です。

各授業で行われる作業には上の図のようなものがあります。

《建築総合コースの履修条件》

(1) 設計科目について

①建築設計Ⅰから 3 年次の建築設計Ⅴまでは必修ですが、建築設計Ⅵは選択です。

②原則として、1 年次設置の建築設計Ⅰ、建築設計Ⅱを未修得の者は 2 年次以降に設置の設計系科目は履修できません。

③原則として、2 年次に建築設計Ⅲ→Ⅳ、3 年次に建築設計Ⅴ→Ⅵ、4 年次に総合設計→卒業設計と段階的に修得していきます。

(2) 実験科目について

①建築実験Ⅰと建築実験Ⅱは必修です。

（詳細は授業ガイダンス等で指示します。）

(3) ゼミナールについて

ゼミナールの受講には、最低修得単位による受講制限があります。詳細は３年生４月のガイダンスで指示します。

(4) 卒業研究着手条件

キャンパスガイドを参照してください。

(5) 卒業要件

キャンパスガイドを参照してください。

2. 教養科目・基盤科目の学び方

建築設計と教養科目・基盤科目の係わりは、建築の安全性・快適性・利便性（効率性）を追求するための基礎知識を与えるものです。

建築の設計・建設業務に携わる者は、強い理性に裏打された倫理観を具えていなければなりません。教養科目の勉強は、技術に偏重することのない心豊かな人間性を育みます。

教養科目で、建築総合コースに関連深い科目としては、「科学基礎論」、「科学トピックス」、「歴史学」、「芸術学と文学」、「政治経済論」、「社会学」などが挙げられます。さらに、「国際関係論」なども教養として重要ですが、高学年次のゆとりのある時間に履修する方がよいでしょう。

基盤科目（共通科目）の「英語系」は、1 年次～2 年次に設置されていますが、継続的に学習する必要があります。専門においてもキャリアパスイングリッシュは、TOEIC 受験や社会人基礎力、大学院への進路選択の上で大切な科目です。英語は、これからの国際化に対応する上で、また諸外国の文献等を整理する上でも必要となってきます。できる限り卒業までに履修することを勧めます。

基盤科目（連携科目）は、専門を理解する上で非常に重要です。1 級（2 級）建築士の試験科目は、設計製図と学科目（構造、施工、計画、環境・設備、法規）があり、美的デザインは含まれていません。設計作業は、専門科目の総合知識を背景として初めて、良い設計が可能になります。基盤科目が、必要あっての勉強として、関連する専門科目の低学年時に設置されるのもこうした理由からです。

3. 設計科目の学び方

1 年次から 3 年前期まで必修となっている「建築設計」は “建築力”を総合的に習得する科目であり、その目的は単に製図技術を習得するだけにとどまりません。事例建物や敷地を読み解く分析力、要求条件を整理して建物のあり方を提案する企画力、建物の造形や空間の使われ方をイメージするデザイン力、提案の魅力を適切に伝える表現力などが、設計課題によって養われます。

計画、構造、環境・設備、材料の全分野の専門知識が求められる建物設計は、各科目で習得した成果を結びつける役割を果たすことから建築工学科カリキュラムの柱と位置づけられています。3 年次以降を含めた 4 年間を通して、建築設計の課題は小規模で単純な機能の建物から大規模で複雑な機能の建物群や都市へとレベルアップしていきます。それぞれの課題が次の課題へのステップとなっていますので、一つ一つ着実に習得していくことが求められます。建築設計の課題は、どれも多くの時間と労力を必要としますが、費やした時間の分だけ成長することができ、同時に設計することの楽しさが増していきます。そのため、時間や労力を惜しまずに粘り強く丁寧に取り組む姿勢が何よりも大切です。また、実際の優れた建築をたくさん訪れて空間を体験し、よく観察することが建築設計に求められる感性を育む上でとても効果的です。

１年次は、建築図面のトレース課題を通して道具の使い方や線の引き方などの製図基礎を学ぶことから始め、２年次以降の自由設計課題に向けて“建物を計画するいろは”を習得します。

写真１：図面やスケッチをかきながら考える

＜1 年次＞建築設計Ⅰ・Ⅱ
- 設計図をつくるための基礎知識の修得
- 建築を見る、触る、測る
- 建築を図面や模型で表現
- 建築空間の基本的な構成手法

＜2 年次＞建築設計Ⅲ・Ⅳ
- 与条件の分析と設計条件の整理
- 空間をイメージして表現
- 設計するときの思考展開の過程を体得
- 講義で学んだ建築史、建築空間デザインの原点、構造や材料の基礎理論を課題で応用

＜3 年次＞建築設計Ⅴ・Ⅵ
- 複合的な用途の建物や街のデザインへ
- 鉄筋コンクリートや鉄骨の骨組み、各種建築物の知識をふまえた「ものづくり」
- コンピュータを使った作図やプレゼンテーション
- 教員と学生の共同学習

＜4 年次＞総合設計
- 時代の要請に応えるテーマを選択
- 調査研究・製作・設計作業
- 成果を発表し互いに批評・評価

写真２：模型をつくって空間を確認する

4. 情報系科目の学び方

昨今、業界を取り巻く世の中で、情報がもたらす威力は絶大であり、それは、建築の分野でも例外ではありません。大量の情報をどのように有効に生かすかということを前提に、情報の収集方法、その分析の仕方を学びます。当然ですが、ツールはコンピュータが主流になるので、まずコンピュータの使い方と情報収集法および分析法を学びます。そしてさらに建築工学の中でどのように生かすかについて学習します。最近はコンピュータの普及でインターネットによる情報の検索や e-mail による情報のやり取りが行われていて、そのようなことを情報系科目の内容とイメージされることもありますが、それは序の口です。大学の情報系科目では、さらに高度な内容を卒業時までに修得しなければなりません。

建築学における情報系科目に関連した事項は、建築の様々な場面で使用されています。具体的な内容については、授業内で最初に詳しく担当教員から説明があると思います。

建築総合コースでは、情報系科目として、2 年次に特別設計Ⅰ（1 単位）を設置しています。建築用製図ツール（BIM、3D CAD）やプレゼンテーションツール（作図レイアウト、画像処理）の基本的な操作方法を習得します。

写真３：コンピュータで図面や仮想空間をつくる

5. 実験科目の学び方

建築実験は 2 年次から始まります。建築実験Ⅰ、建築実験Ⅱがあり必修科目です。

住宅から超高層に至るまで、全ての建築物は木材・コンクリート・鉄という 3 種類の材料の組合せで造られています。建築実験はこれら 3 種類の材料の強さや破壊の仕方を比較することから始まります。また、石材などの建築物の仕上げ材料実験、温熱環境実験についても触れて行きます。2 年次で材料の基本的特徴を学び、3 年次で地盤の性質、騒音測定実験など実際の建築物に近づけたレベルへと進みます。これらの実験項目の受講により、建築材料、建築構造、建築環境に関する実験データの整理方法、レポートの書き方などを習得します。

建築設計や総合設計の科目で設計する建築物には、時には地震や強風といった大きな力が加わることがあります。このような時でも建築物は健全であること、あるいは多少の被害を受けたとしても人々には被害をもたらさないことが要求されます。そのためには、想定以上の力が加わった時にどのような壊れ方をするかを学生の時に体験し、観察しておくことが大変重要なのです。

建築実験は、提出されたレポートにより評価が行われます。レポートでは、目的、目的を実現するための実験計画、計画に従った実験実施、得られた成果を自分の考えで理解した上での結論、という一連のストーリーをまとめることが必要です。

現代の私達にはいずれの科学分野においても実験は不可欠という認識があります。

皆さんが卒業後、実務においてさまざまな問題にぶつかった時、あるいは、独創的なアイディアを実現させようとする時に、筋道をたてて問題点を明らかにする方法として、実験を行い、レポートを作成する過程について学ぶことは、今後大いに役立つと考えます。

6. ゼミナール

３年次からゼミナールＡとゼミナールＢが始まります。ゼミナールは選択科目ですが、通常の授業と異なり、今までより専門的な研究・設計への導入となります。将来の職業や卒業研究に進む上で、非常に重要となりますので、ホームページなどで各分野及び各教員の研究内容をしっかりと調べてください。

また、２月に行われる卒業研究審査会･設計審査会ともに各研究室選びの参考となります。是非参加ください。

（ゼミナール受講には単位制限があります。詳細は３年次ガイダンスにて案内致します。）

7. 卒業研究

一年間の取り組み方

最終課題となる卒業研究・設計の１年間の流れを紹介します。

・３年次１月下旬～2 月初旬〈卒業研究生募集〉

ガイダンスを開催し、面接等により 3 年次の段階で研究室の仮配属を行います。

・３年次２月中旬以降〈現卒業研究生からの研究引継ぎなど〉

現卒業研究生から、実験方法・データの整理の仕方・模型の作り方等を引き継ぎます。

・4 月初旬〈研究室配属決定〉

4 月に入り新学年となった際に正式に研究室配属が決定します。また、卒業研究のスタートとなります。

・7・１１月〈研究中間発表〉

前期の実験結果をまとめ、研究報告を行います。

また、今後の研究方針等について話し合います。

・1 月〈卒業論文、概要の作成〉

研究成果をまとめ、卒業論文審査会に向けた概要を作成します。

・2 月〈卒業論文審査会用パネルおよび論文作成・提出〉

一年間の卒業成果をパネルにまとめて、生産工学部建築工学科の開催する卒業研究審査会にて発表します。

写真４：建築工学科主催　卒業研究（論文）審査会

■ 建築デザインコース

1. 建築デザインコースの特徴・教育

建築工学科の３つのコースは、どのコースも建築の専門家となるための設計・計画、構造、環境、設備、材料・施工などすべての分野の基礎を学び、卒業時に一級建築士の受験資格（実務以外）を取得します。

では建築デザインコースでは、その上いったい何を学ぶのでしょうか。

建築デザインコースの特色は、

１）設計演習（設計製図）の授業が全ての学期（クォーター）にあり、豊富な設計演習で建築の力を養う。

２）30 人固定の少人数制で、先生との距離が近く、切磋琢磨する環境がある（課題ごと異なる教員２名）。

３）最高レベルの実務経験に基づくリアルなデザイン教育を行う。そのための工夫された課題を出題する。

ことにあります。

教育の目標は、何よりも**デザインすること**をしっかり学ぶことです。（デザインすることとは何かについては後で述べます。）その上で、① 建築の根幹を担う設計のスペシャリストの養成と、② 設計者ではないが建築を支える各分野の専門家となる人の高い**建築力の養成**を目指しています。設計者であろうとなかろうと、一流の専門家は、一時の風潮にとらわれることなく「建築の良し悪し」を判断する力がなければなりません。この建築力を養成し、真に骨のある良い空間を実現する技術を学び磨くことが目標です。

１）の「設計演習授業」がすべての学期にあることは、この考え方の表れです。

２年次から４年前期まで、**「手にとれるものから地域や環境的な大きなスケールまで」**連続するスケールで人の住むことと空間の関係を考えます。設計課題ごとに相互に関連する**「テーマ」と「学び方」**で、建築を様々な方向から捉え、空間の構想力と設計力、建築を見る眼を広く深く養います。

設計はアイデアや思いつきがなければできないという人がいますが、本当は**「設計する技術」**が大切です。**「柔軟な思考や見分ける力」**は重要ですが、それは鍛錬により養うことができます。

デザインコースでは、この**設計する技術**を徹底して教えます。**良い設計をするための方法とプロセスを、現実の設計事務所の仕事のフローをベースに具体的に指導します。**設計内容を効果的に**伝える方法と技術**も具体的に指導します。そして**一人ひとりに潜在する力を最大に伸ばす**ために、基本的なレベルを学ぶことが必要な学生には基礎的な指導を、**世界と伍して建築を探究**し腕を磨きたい学生には最先端レベルの指導をします。

このような設計演習の授業と、デザイン論、設計論、エクステリアデザイン、環境デザインなどの座学が連携して、ものを見る眼を養い、建築の力を鍛えます。

２）の「少人数制」の利点は、まず **30 人の学生を２人の先生が同時に指導する**ので、**密度の濃い指導**が可能となります。一人ひとりと十分な時間をかけて対話し一緒に考えます。**グループで討論**できることもこの少人数制ならではのアドバンテージです。

一つの課題に**複数の視点**を交錯させることで、**こたえはひとつではない**という創造の本質を実感として分かるでしょう。**建築の無限の可能性**を発見するかもしれません。課題ごとに異なる教員が担当します。

先生と学生の距離の近さは、授業時間や教室の中だけにおさまらない生きた授業を可能にします。これらにより１）で述べた建築力の養成が可能となります。

建築デザインコースに進むには、1 年次の最後に行われるコース分け説明会での指示に従いコース所属を希望します。毎年の募集人数は 30 人で、条件は１年次の建築設計演習Ⅰ・Ⅱをともに習得していること、所定の単位数を取得していることです。しかし何より**大切なのはやる気のあること**です。自信がなくてもしっかり課題に向き合い、努力を重ねれば、コースの教育があなたを大きく**成長**させます。

学生が自分の色を出しそれぞれに成長していくことこそ、コースの教育の最大の喜びです。(ゴール＆フューチャーの項目参照：デザインコースでの学びからの進路の展開について説明しています。)

３）の「リアルな教育」とは何でしょうか。

建築の設計課題は、常に PBL（Project Based Learning & Problem Based Learning）であり、アクティブラーニング（学生の主体的な学びによる学習）です。では、建築の設計はひとりで成し遂げられないのに、課題をひとりで行うのはなぜでしょう。

これはなかなか奥深い問いです。

一つの答えは**「ものをつくりだすことは、自己との厳しい対峙による」**からです。ものを**かたちづくる**責任は、皆の平準化された合意にではなく、個に存するしかないからです。もう一つの答えは「一人で行う演習は重要であるが、それだけでは不十分である」です。ものをかたちづくる過程には、多くの専門家のみならず、一般の人びとや社会の多くのものごとが関係します。これら相互の**関係を構築する**ことなしに建築の設計行為は成り立ちません。

建築デザインコースの設計課題は、このような**空間創造の厳しさ**と**現実社会における建築の存在のしかた**という、建築のリアルな二面を意識してつくられています。課題に向き合うことを通して、リアルな**新たな何か**を見つけ出してほしいと思います。我々は、それを**一緒に見つけたい**と本気で思っています。

課題のラインアップ

実際の課題は、練習帳的なメソッド（方法・建築技術の習得）課題、家具や身体的な小さな空間を大切にする課題、地域の人や仮のクライアント（発注者）と具体的な意見を交換しながら進める課題、フィールドワークや豊かな自然環境を訪れ建築することとは何かを問う課題などを実践し、**自ら問題を発見し空間を構築する姿勢**を養ってきました。

設計の瞬発力を養う即日設計や、建築作品の探究、表現の研究を通して**建築を深く知る**課題、建築の作品や現場の**見学**も行ってきました。コンピュータを使う演習はデザインコース以外は特別設計Ｉで行いますが、デザインコースでは各設計課題の中でこれを習得します。エコロジーやエネルギーに関するシュミレーションについても学びたいと思います。

将来、より柔軟な授業実施が実現されれば、さらに特色ある課題設定や授業方法、指導者の招聘に努めたいと考えます。

これまでに、２年生では、学生の家族が仮想クライアントになり具体的な設計条件を共有しながら進める住宅設計課題や、大学のある大久保商店街の人びとと話し合い計画する課題、３年生では下町（谷中）のまちでのフィールドサーヴェイを通して計画課題を発見することから始める課題、三浦半島の自然保護区で自然環境の成り立ちを体感し理解することから建築を構想する美術館の計画なども行いました。集合住宅の課題では、どのような計画を行うかを、社会や地域、建築技術の視点から、設計の宣言としての「契約書」として 2000 字の言葉にまとめることから始めることもしました。頭の中にあることを、言葉を使って論理的にまとめ発表することは大切な能力です。

2. 建築デザインコースの先へ

建築デザインコース審査講評会

１年に１回、１２月に、建築デザインコース賞の審査講評会をおこないます。コースの学生全員が一同に会し、学年や違なる課題の枠を越えて競い腕試しする機会です。各学年の授業を担当する教員も全てそろい、招待ゲスト審査員も含め、作品を批評していただくチャンスです。審査会では徹底した議論の末に最優秀作品を１点選出し、また各審査委員から個人賞が授与されます。

学びの先へ・ゴール＆フューチャー

建築デザインコースが 30 人の少人数コースとなってから何代かの卒業生を送り出してきました。その間、素晴らしい課題作品が多数制作されました。学外の設計コンペティションで上位に入選したり、卒業設計が全国レベルで高く評価されるなどの実績も積み重ねてきました。

建築デザインコースでは**「よりよい物の存在のさせかた」**という建築の基礎あるいは哲学を学ぶわけですから、卒業生は、建築に関わる社会のさまざまな分野で活躍することが期待されます。

進学　デザインコースの卒業生は、他コースの学生に

比べ大学院に進む割合が多いようです。分野は設計だけに限りませんが、欧米の建築教育は６年以上が基本であることからも、設計教育の奥深さを理解することができるでしょう。今後は、海外の大学へも積極的に留学などしてくれるとよいと思います。

卒業後の進路　この手引きの学科全体の説明に加えて少し詳しく紹介します。これまでに卒業生は、

・設計者としては、スーパーゼネコン設計部、大手組織事務所、アトリエ個人事務所、工務店など

・デザイン・家具・照明の分野では、照明デザイン事務所、家具デザイン、デザイン事務所など

・施工管理では、スーパーゼネコン、大手・準大手ゼネコン、日本最高峰の工務店（数寄屋や茶室、神社仏閣などの仕事)、地域の設計事務所や工務店など

・職人では、左官職人（京都)、石工職人（滋賀）

・公務員としては、都道府県や市区町村職員

・他の専門分野の専門家としては、構造、材料、環境の専門家

などの職に就いています。

強い設計マインドをもつ学生が、多様な建築の分野に進むことはとても重要です。これからは、さらに工務店の設計力を高めることは期待されますし、建築の部分のデザインと施工が一体化した建築生産の場面にも、卒業生が進出してくれるとよいと思います。

3. ゼミナールと卒業研究・卒業設計

ゼミナールと卒業研究

３年次のゼミナールと４年次の卒業研究は、所属する研究室の教員の指導のもとで行います。建築デザインコースの学生は、居住空間デザインコースの研究室以外のどの研究室への所属も希望できます。ゼミナールの履修と卒業研究については、学科共通事項です。

卒業設計

建築を学ぶ学生にとって、卒業設計（卒業制作）は、のりこえなければならない大きなイベントです。建築について４年間に学んだことを全て、自ら構想するひとつの計画案に凝縮し、かたちづくることに大きな意味があります。世界中、どの時代にも、建築を学ぶ学生は、卒業制作に全力で向き合ってきました。毎年、卒業制作を成しとげた学生たちが、ひとまわりもふたまわりも成長するのがよくわかります。

意匠、計画系の制作例に限らず、デザインコースでの学びを生かして、構造、設備、材料、環境などの技術や研究とデザインのインテグレート（総合、統合すること）をまとめるような卒業設計にも巡り会いたいと思います。

4. さらなるメッセージ

建築デザインコースの教育の基礎は、泉幸甫客員教授と橋本緑郎研究所教授らによりかたちづくられました。その精神と内容は、頑なにかつ柔軟に、将来に向かい受け継がれ、発展していきます。

■ 建築の学びはつづく

建築を学ぶことは広く奥深く、当コースでは**将来にわたり学びつづけるための基礎**を教育します。①基礎的な技術や知識をくり返し学びしっかり身につけること。②ものを見る眼を鍛え自ら考える力を養い、新しい何かをつくりだす土台をつくること。③アイデアや考えをひとに伝え、意見を交わし、共につくりだすために必要なコミュニケーションする力を養うことを重視します。

■デザインすることはつくるよろこび

デザインとはいたずらに新奇な形態をつくるのではなく、**ものごとが存在する意味を問う**ことです。ものごとの本質を探究し原初にたち還ることによって、新たなものを生みだすこと。ものごとに**秩序を与え**かたちづくることこそデザインすることの本質です。リアルな感覚の追求を通して、何かを掴む高揚感や楽しさを知ってほしいのです。

■ものを見る眼を養う

人に感動を与える空間は、それをつくる人知の深さや心の豊かさから生まれます。そのためには、建築のみならず広く芸術や人文・社会科学、科学技術などに

も興味をもつことが大切です。**心の豊かさや感性を養う**ことは、当コースの大切な役割ですから、日々の授業や生活を通してこれをサポートします。

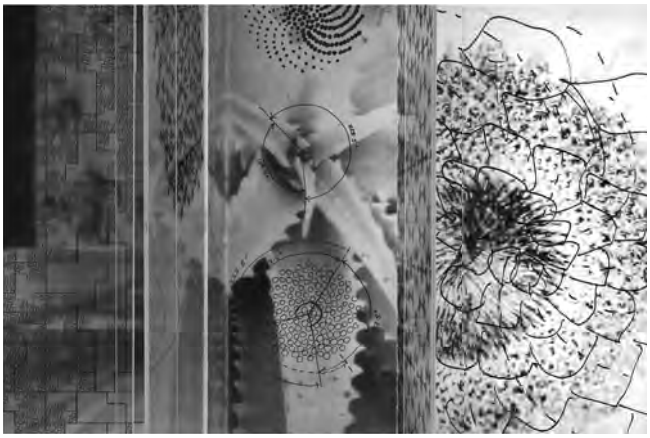
■つくる手

しっかりした基礎力は、君たちがこの先長い間に培う**「つくる手」**の基本となります。図面はつくる意志を相手に伝える言葉です。手でスケッチし模型をつくることは、**身体すべてで新しい何かを見いだそうとする**ことにほかなりません。手は脳と直結するように訓練されなければなりません。

■ものとのコミュニケーション

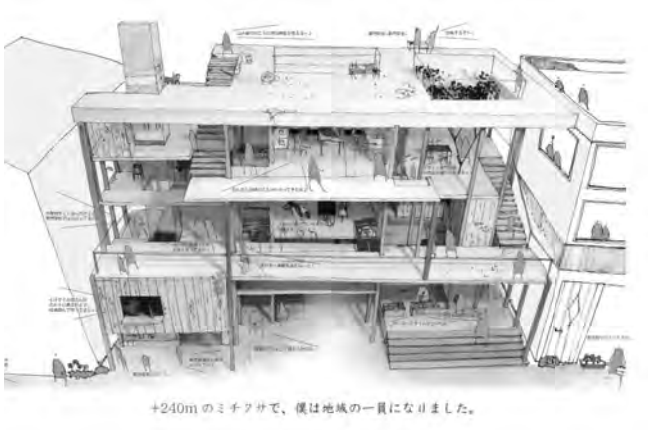
実際の「もの」と交感する力がない限り高い質をもった建築はつくれません。それには、材料（素材）、構法、ディテールなど、ものをよく観察し、もののもつ特性を知って再構成することが必要です。

■ exhibition elements H-edge

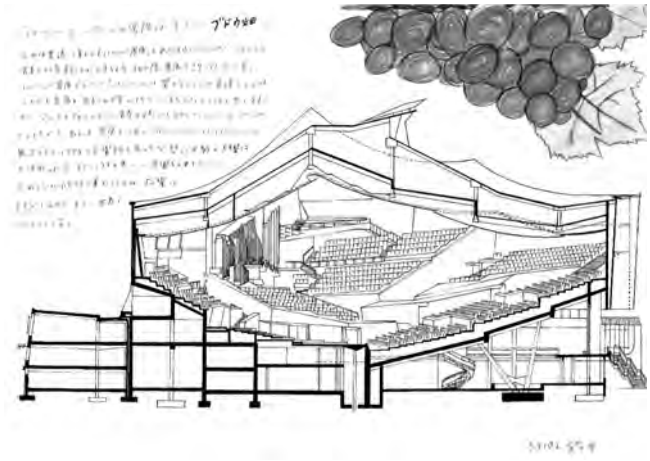


■ exhibition elements

5. 授業風景・成果



■ neighbourhood office (student work 4 年)



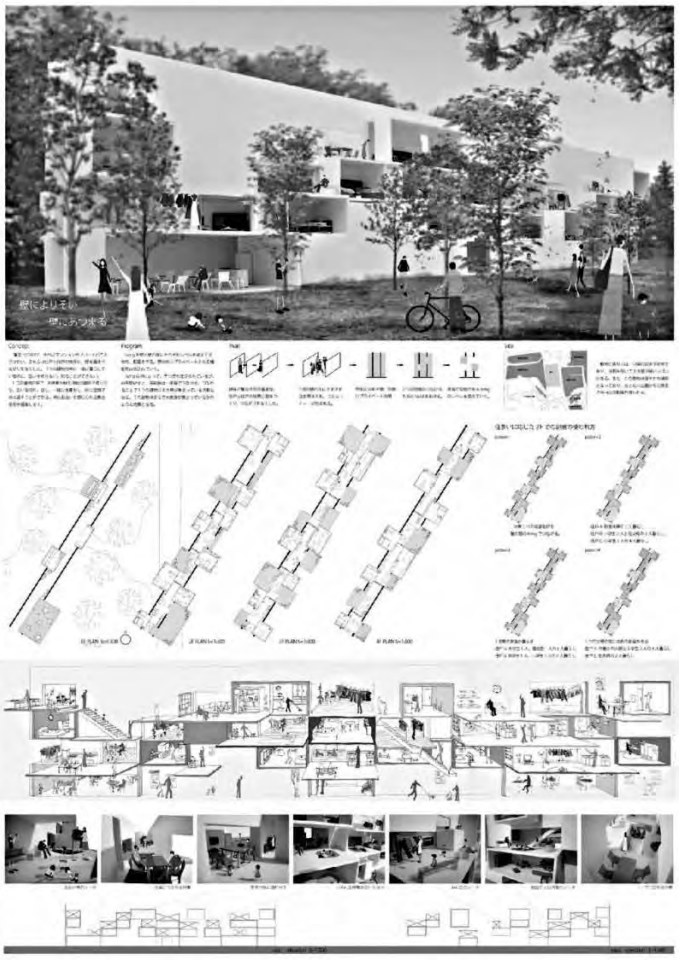
■ philharmony berlin の探究 (student work 2 年)

■ 模型写真の撮り方を学ぶ

■　谷中フィールドワーク　あれ、こんなことに気がついたの！

日常の学習風景 ■

建築デザインコース賞　審査・講評会■



2011 年度３年次前期課題［集合住宅］
最優秀作品「壁によりそい壁にあつまる」
2011 夏期デザインコース賞・第 11 回住宅課題賞２位■

■ 居住空間デザインコース

1. 居住空間デザインコースで学ぶこと

このコースは、名前の通り「居住空間」を中心に建築を学んでいきます。その軸となるのは「住宅・集合住宅・街」です。建築の種類は、他に「オフィスビル」や「店舗」「公共施設」「ホテル」「美術館」「複合施設」など、数え切れないほど多く、また、建築に関する専門分野も設計や計画、歴史、構造、材料、設備など多岐にわたっています。建築は幅広く奥深い分野ですから、大学時代だけですべてを学ぶことはできません。このコースでは、私たちの身近な「居住空間」を軸に学び、建築の内部から考えることから始めて、発想を広げていきます。それは、住宅がきちんと設計できれば、どのような建築も設計できると考えているからです。

※「居住空間」とは：

私達の身の回りの生活からつながる建築や環境です。その基本となる住宅は、戸建住宅だけでなく、低・中・高層の集合住宅が非常に大きな存在になってきています。店舗などの併用住宅やシェアハウスや寮や老人ホームも住宅の一種と言えるでしょう。また、我が国には歴史的な民家や町屋、武家住宅などの美しい住宅がありますし、世界にも数多くの学ぶべき住宅や集落・街があります。

それら多種多様な住宅や建築作品、歴史についての講義、小さな別荘から集合住宅団地に至る住宅設計、家具デザイン、インテリアデザイン、照明デザイン、エクステリアデザイン、設備設計、住宅生産、維持管理など住宅に関する様々なことを学習します。

2. 学習目標「眼を養い、手を練れ」

この言葉はこのコースを設立した故宮脇檀先生（元研究所教授）が、学生への教育目標として掲げた言葉で、その精神は塾長を受け継いだ中村好文先生（元研究所教授）、さらには渡辺康教授、亀井靖子准教授を中心とする現コースにも受け継がれています。

「眼を養う」とは、良いものを数多く見ることによって建築とは何かを理解し、自分の作る空間の良し悪しを判断できる能力を身につけることです。そのためには種々の勉強が必要になります。まずは古今東西の名作建築や素晴らしい伝統的建築を見て体験する。美術館に行って絵画や彫刻を鑑賞したり、素晴らしい映画を見たりすることも建築を見る眼を養うことになるでしょう。「眼を養う」には何と言っても時間や手間やお金（なければ作る）を惜しんではいけません。

「手を練る」とは、まず手を動かして“スケッチをする”ことに慣れることです。どこかに行き魅力的なものを見つけたら“スケッチをする”。手を動かすと対象が良く見えてきます。また何か考えたら“スケッチをして”確かめてさらに発想を広げる、人に自分の考えを伝える時にも目の前で“スケッチをして”説明する。そして手を動かして“模型を作り”検討し提案する。そのような習慣が将来の力となります。

この「眼を養い、手を練れ」は先生達によって２冊の本となり、授業のテキストになっています。

設計製図や家具デザインなどの演習授業は課題提出のペースが早く、かつ必ず時間内に仕上げて提出するよう要求されます。現場に行って実測調査をしたり、手を動かしてモノを作ったりすることも要求されます。グループ作業では、友人たちと一緒に夜まで作業することもあるのです。「めんどうだと言わないこと。骨身を惜しまないこと。それがいやならすぐ学校を止めた方がいいよ！」と、毎年最初の授業で担当の先生

が新入生に話します。

建築を学ぶことは

1. 良いものを多く体験し、ものの善し悪しを判断できる。
2. 様々な状況の”全体”を観察し把握することができる。
3. 固定観念にとらわれず発想を柔軟に広げることができる。
4. ものごとを立体的に空間として（3 次元-4 次元として）考えられる。
5. 考えをまとめ、人に分かり易く説得力を持って提案することができる。

ことです。

このコースでは、それらを自分の頭や感性で考えて、表現することは楽しいと思う人を育てることを目標としています。それは、建築に限らず、あらゆる仕事や人生において必要なことだとも考えています。

3. 教育環境

このコースを設立した宮脇檀先生は、「美しい建築を学ぶ学生には美しい環境が必要」との信念を持っていました。そして、このコースの就任にあたり、専用の教室を作ってくれるよう学校に頼み、そこにキッチンを置き、名作椅子をそろえ、自分の使っていたテーブルや椅子も学校に持ってきました。

その後任となった中村好文先生は清潔な作風で知られる住宅作家ですが、家具デザイナーとしても著名な方で、先生が設計された椅子もいくつか教室に置いてあります。また中村先生が監修した教材用キッチンは、材料や仕上げ、引き手などに種々のものを使用し、学生が実際に使用しつつ学ぶことができるようになっています。こんな教室で学べるのは、世界中できっとここだけではないでしょうか。

(1) 教師陣

このコースの教育を組み立てるのは渡辺教授ですが、授業はそれぞれの分野で一流の仕事をしている先生方によって行われます。卒業生は皆、「学生時代に親しく教えていただいた先生方が、とても著名な方だったと、社会に出てから初めてわかった」と言っています。授業はわかりやすい言葉で進められ、内容は実社会で重要なことばかりです。聞き流さず、しっかり身に付けてください。

教師はそれぞれの専門分野について教える立場にありますが、現在も新たな分野に日々挑戦している現役の先輩でもあります。一人の先輩として、できるだけ率直に、現在考えていることを伝えようとしています。皆さんも素直にその気持ちを受け止めて、学習して下さい。たとえその時は理解できなくとも、卒業後ずっと経ってから、「ああ、○○先生はこんなことを言っていたのか」、「○○先生が考えていたのはこれだったのか」と思い出すことがあるはずです。

(2) 少人数教育

このコースは 30 人程度の少人数クラスです。少人数教育の良さは学生一人一人の顔が見えることです。しかし、毎週きちんと授業を受け、課題をこなしていかないとついて行けなくなります。個人の能力や適性には違いがありますが、一生懸命やる気さえあれば、教師はそれぞれの学生の適性や潜在的な能力を見出し、実社会で生かせるような指導をします。

少人数クラスなので、同級生だけでなく上級生との交流が多くなります。特に卒業設計の時は 3 年生だけでなく、1、2 年生も 4 年生の手伝いをしています。上級生の手伝いをすることによって、学ぶことが沢山あるはずです。下級生は、授業等で分からないことがあったら積極的に上級生に質問することを勧めます。

卒業後も当コースの卒業生は毎年、卒業生全体の同窓会を開いています。勿論同学年の友人たちと旧交を温めていますが、違う学年の卒業生とも話し合っている様子を見ると、少人数のコースならではという感じがします。

(3) 女子対象の理由

どの大学の工学部でも、女子が最も多いのは建築学科で、しかも真面目で優秀な学生が多いと言われています。しかし現実の建築社会、特に大手の建設会社で女子が最前線で働くことは厳しいと言われてきました。ところが近年、その感性や人間関係を調整する能

力は、大手の設計部や建設施工でも増え、住宅関係や商業・インテリア・出版関係など様々な分野で生かされています。

とはいえ、女子学生は卒業後には社会においては、出産・育児といった仕事を続けようとした時には厳しい現実があることも事実です。しかし、「居住空間」がきちんと設計できれば仕事を続けていくことはできますし、地域の住環境を良くしていくことに生かすこともできます。卒業生一人一人が社会で評価され、必要とされる場を持つことが後輩への道を広げていくことになります。

オリエンテーション（1 年次）

(4) 国内研修旅行

当コースでは 2 年の時に、奈良・京都に 2 泊 3 日の国内研修旅行に出かけます。例年ほとんどの学生が授業の延長と考えて参加しています。

世界遺産にもなっている町並みや寺院を見学し、最後の晩には、現地作家によるスライド会と懇親会をするのが慣例になっています。非常勤の先生方も来て下さり、学生には楽しい思い出となっています。

また、２年に 1 度海外研修旅行も行います。その特徴はスケッチをしながらゆっくりと建築や街の空気を味わいながら体験することです。

国内研修旅行（２年次）

(5) パーティ

コースでは大小何回かのパーティが開かれます。多くの場合 4 年生がリーダーとなって開催し、皆が作業を分担します。料理や飲み物を用意し、照明を工夫し、会場をデザインします。その他、招待状の発送、ポスター製作、催し物の企画などをします。100 人以上のパーティをトータルマネジメントするのは、大変ですが貴重な経験になります。

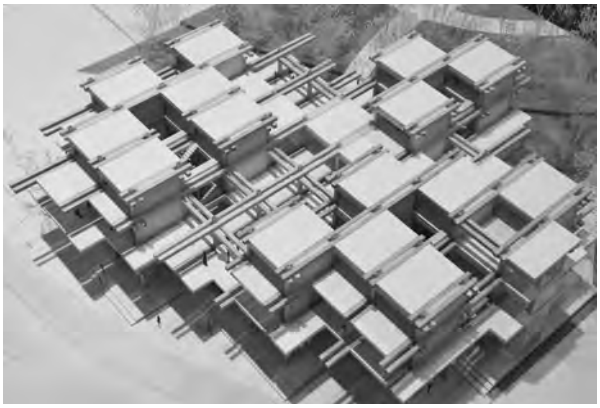
建築に関する仕事は一人でできる仕事は何一つありません。“仕事全体の流れを理解し、その中で自分のすべき仕事を判断して何でもこなす身の軽さ”、“与えられた仕事を時間通りにやり遂げる責任感”、“他人と一緒に楽しく仕事ができる協調性”が必要です。皆さんが社会に出た時に求められるのは、設計能力より、こうした社会性なのです。パーティはこうした能力の大切さを考えさせてくれる機会でもあるのです。

(6) 宮脇賞

コースの創設者である宮脇先生を記念して、1999 年度から「宮脇賞」を設けました。この賞は当該年度の設計課題の最優秀賞です。そして「宮脇賞」審査会はその年度の総合講評会となります。応募できるのは居住空間デザインコースに在籍している 1 年生から 4 年生までの学生全員です。各自が 1 年間の提出作品の中で 1 番と思う作品を選び、冬休みに図面や模型に磨きをかけ、A1 用紙にわかりやすく表現して提出します。

居住コースの先生方による第一次審査を通過したものについて、ゲスト審査員も入れて本審査を行います。ゲスト審査員にはこれまで、阿部勤、鈴木洵、鈴木成文、東孝光、東理恵、高橋靱一、塚本由晴、納谷学（２回)、納谷新（２回)、曽根幸一、古谷誠章、ヨコミゾマコト、山本理顕、栗生明（２回)、西沢立衛、平倉直子、杉浦伝宗、山下保博、堀部安嗣、元倉眞琴、松永安光、北山恒といった先生方が来て下さいました。審査員の個人賞もあり、その賞も学生にはとても楽しみです。

宮脇賞で審査をする講師陣



第18回宮脇賞「集うこと」

4. 授業科目について

コース科目について

当コースにはカリキュラムに沿った科目が設置されています。２年次の住居学・住宅設計表現演習・住居史・家具デザイン、3 年次の集合住宅論・建築設備Ⅱ（旧名：住居設備デザイン）・照明デザイン・エクステリアデザイン・インテリアデザインです。各科目は互いに連携しており、すべてを受講することで住宅設計に必要な総合力が付くように計画されています。また、どの科目にも特徴があり、他大学の建築を専攻している学生や外の建築関係者にとっては「羨望の的」です。例えば、集合住宅論は、学科共通科目ですが、「集まって住もう」を監修した渡辺教授が授業を行います。その他の科目もその分野の第一線で活躍している先生が直接指導下さるものです。恵まれている環境を十分に活かして学んで欲しいと思います。

その他、履修条件、卒業条件についてはキャンパスガイドを参照してください。

設計製図と履修注意点

設計製図は自宅での課題が多く、そのための時間も多くかかります。また１年次、２年次、３年次と段階を追って難しくなりますから、一度に何年分もの設計製図を履修することは事実上不可能です。1 年次より単位を落とさず、積み重ねて行く必要があります。

1 年次から卒業に必要な最低の単位数で卒業しようと思っている人はいないでしょうが、上級生になって、関心が広がってくると、最低単位数で卒業しようと思う人も出てきます。しかしそれは大変危険なことです。自分では合格点が取れると思っていた科目の単位が取れず、わずか１単位か２単位で卒業できないということの無いようにしましょう。

模型写真撮影の授業（1 年次）

家具デザインの授業（2 年次）

5. ゼミナールと卒業研究

ゼミナールは 3 年になって、卒業研究は 4 年になって履修します。どちらも少人数グループで、指導教員を囲んで行う授業です。

ゼミナールでは、自分の興味のあるテーマを選ぶことができます。ゼミナールは、講義を一方的に聞くのではなく、質問や意見、自分たちで学んだことや調べたことを発表したりします。

卒業研究は学生の興味と教員が指導したいテーマを照合して決めます。自分の適性や好み、将来の進路を考え、各研究室についての情報を集め適切な選択をして下さい。

渡辺教授は、場と場や、人と人などの間の様々な関係を考え、それに対応する建築言語を見ていきながら、住宅・集合住宅・公共施設の魅力ある空間を考察します。卒業研究では、各自の自由な視点（問題設定）で考察し、それを生かすテーマで卒業設計に挑みます。

亀井准教授の専門は建築計画で卒業論文を中心に指導します。日本の郊外建売住宅・団地とアメリカの建売住宅の研究を主に行っており、DOCOMOMO という近代建築の保存・記録に関する国際組織への参加もしています。卒業設計は渡辺教授が主となり指導します。

4 年次の卒業論文と卒業設計は大学時代の総まとめです。1 年かけてしっかりやり遂げた時の満足感は何にも代え難いものです。楽しみにしていて下さい。

設計の作品指導風景（4 年生）

卒業論文審査会での発表風景

6. 卒業後の進路

女性が仕事を持つのが当たり前の時代となりました。工学部の、しかも具体的な職業イメージの強い建築工学科を選んだ貴方たちの職業への志は、女子学生の中でも一段と高いと想像できます。だからと言って就職先のことを 1 年生の時から心配する必要はありません。教養豊かで、他人を理解できる人、ユーモアのセンスがある成熟した大人、そんな人になれるよう、1、2 年の時は、一般教養を高め、幅広く建築を学んでください。

このコースを卒業した学生は、設計事務所やハウスメーカー、建設会社、不動産会社、マンション・ビル管理会社、メーカー、公務員等、多種多様の職業についています。大学院に進む人も年々増えています。独立して設計事務所を設立した先輩や、民家再生の会社を立ち上げた先輩も居ます。他に、東北地方の木工研究所の研究員、テキスタイルデザイナー、老人福祉の住宅改造アドバイサー、イラストレーターなど、他分野に進出している先輩もいます。

私たち教師はサポートをしますが、最終的に「仕事や進路は学生が自分で決めるもの」と思っています。一所懸命考えて自分で選んだ道なら、たとえ失敗したと思っても後悔することはありません。人生は長く、色んな生き方があります。進路に良し悪しはなく、どれだけ一生懸命に取り組めるかなのです。

■ 生産工学系科目（各コース共通）

1. 生産工学系科目の概要

生産工学部では基盤、教養、専門分野の知識習得のみならず、学生の皆さんが自ら考え、将来に渡り社会で活躍できる能力獲得のため、カリキュラムに基盤科目、教養科目、専門科目に加え、生産工学系科目という科目群を整備しています。生産工学系科目は、創造力や経営管理能力といったジェネリックスキルを身につけること、および経営・管理に関する知識・能力を身につけることを目的とした科目群です。企業インターンシップの先駆けである「生産実習」は本学部創設当初から開講されている生産工学系科目を代表する科目です。

生産工学系科目は 2007（平成 19）年度に専門教育科目群から独立した後、継続的に改善が行われ、2017（平成 29）年度のカリキュラム改定においてキャリア形成教育とエンジニアリングデザイン教育を柱とした科目群へ改定されました。これらの二つの柱の中心的な役割を「生産実習」が果たします。大学で学ぶ理論と技術を実践的で活用可能な知識・技術とするための重要な科目群です。

建築工学科では、学科共通科目として下記１１科目２２単位を設置しています。卒業要件として生産工学系科目から必修１２単位を含めた合計１６単位以上の修得が必要です。

生産工学系共通科目

科目名	単位数	学年	ねらい
キャリアデザイン	2 必修	1 年	自らの将来展望・目標、その実現に向けた学び。
キャリアデザイン演習	1 必修	2 年	キャリアデザインの実践演習。
技術者倫理	2 必修	2 年	経営倫理とは、技術者倫理とは、コンプライアンスの在り方。
生産実習	4 必修	3 年	学外の企業･機関における実践演習。
プロジェクト演習	1 必修	3 年	建築設計･構造設計の一端を担うプロジェクトの演習
生産工学特別講義	2	3 年	生産実習のフォロー教育、企業研究
生産管理	2	3 年	建設業の概要、建築生産の現状と問題点
SD コミュニケーション	2	3 年	社会における思考力、コミュニケーション力、行動力の養成。
経営管理	2 必修	4 年	グローバル・バリュー・チェーンと組織行動の特性の理解。
安全工学	2	4 年	建設業における安全性
産業関連法規	2	4 年	建設業界関連法規の理解

2. キャリア形成教育と エンジニアリングデザイン教育

皆さんが低学年のうちから自身のキャリアについて考え、自己分析とキャリア開発を経験し、技術者としての将来像を見据えることができるよう、キャリア形成教育に関する科目として「キャリアデザイン」「キャリアデザイン演習」が１・２年次に設置されています。さらに３年次に設置されている「生産実習」では、企業でのインターンシップを通じて、大学で学びを仕事の現場で求められる活用可能な知識とするために何が必要か理解するとともに、自身のキャリア像を実感の伴ったものへとデザインし直すことを目指しています。

また、皆さんが課題設定能力、創造力、コミュニケーション能力、チームワーク力などエンジニアリングデザインに必要な能力を獲得することができるように、「生産実習」「プロジェクト演習」「SD コミュニケーション」といった授業科目を３年次に整備しています。

上記のようなキャリア形成教育・エンジニアデザイン教育に関する授業科目では経験から学ぶことを重視しており、授業・科目間で「経験→内省→教訓→新しい状況への適用→経験」といった経験学習のサイクルが回るように授業設計されています。これらの授業科目を通して 1)ひとは経験からどのように学ぶのかを知り、2)経験から学ぶ力を身につけていってください。

3.「自主創造の基礎１」「自主創造の基礎２」

基盤連携科目である「自主創造の基礎１」「自主創造の基礎２」はこれらの科目に先立って、大学で学ぶためのアカデミックスキルを身につけ、グループで自主・自律的に、さらにはチームワークを発揮して課題に取り組むことを経験する科目です。

これらの科目は「全学共通初年次教育科目」として、日本大学の目指す「自主創造型パーソン」の育成に必要な「将来目標を設定する意識づけ」「学ぶ目的の意識づけ」ができるよう全学部で展開されています。全ての科目に関連する科目ですが、特に生産工学系科目ではエンジニアリングデザイン教育に関する科目と連

携が図られています。

「自主創造の基礎２」では「日本大学ワールドカフェ(N-MIX)」が行われます。日本大学全学部横断で行われるこのワークショップについては、日程等４月履修登録時のガイダンスで説明がありますので確認してください。

4. 生産実習

（１）学習の目的

「生産実習」の教育的な目標は、「建築生産に関わる講演会や生産実習、見学会、および設計・施工、その他建築に関連した生産現場における研修などの体験を通して、建築に関する総合的能力を養う」ことに置かれています。ここでは学外における実践現場での研修、研究機関での体験実習を行い、これらの体験を通じて専門知識をより実践的な形で広げ、理論と技術の関連性を主としながら、社会性のある、また想像力と応用力の確かな技術者の育成を目的としています。

現在、文部科学省は各大学に学生が在学中に就業体験を行い、自らの専攻・キャリアを幅広く捉えるための制度としてインターンシップ制度を設けることを推奨しています。本学部においてこのインターンシップ制度に当たるものが「生産実習」で、本学部の特色あるカリキュラムの一つです。

（２）履修条件

生産実習は必修科目で、３年次の通年科目として設置されています。また履修条件として３年生４月段階で必要取得単位数が定められています。履修にあたっては４月の履修登録時のガイダンスで確認してください。

（３）学習によるメリット

文部科学省が推奨するインターンシップの基本的な考え方は産官学の連携による人材育成です。つまり学生が社会に早期に触れることで将来役に立つ人材を育成しようとするもので、生産実習を行うメリットとしては次のような点が考えられます。

① 自己の教育法の改善・充実
② 学習意欲の喚起
③ 早期による高い就業意識の育成
④ 就業体験を通じて自主性と独立性を育成する
⑤ 専門分野での高度な専門知識に触れ、実務能力を高める。

一方で受け入れ側である企業からも有能な学生の能力と将来性に着目し、次のようなメリットを挙げています。

① 実社会に適応した実践的な学生の育成
② 産業界のニーズを教育現場に反映できる
③ 相互の情報交換を通じて、企業の実態についての理解を促すことができる

このように生産実習は、学生と実習先とで両方にメリットを持つものであり、それらは相互の信頼関係に基づいて行われます。学生は生産実習を実施する際、保険への加入、企業との「覚書」による正式な文書の取り交わし等、多くの手続きを必要としますが、これ以外にもモラルを持って実習に挑むことが必要です。

（４）学習の内容

生産実習は、企業実習に入る前の「事前学習」と建築生産現場などで行う「企業実習」、実習後の「事後学習」、「発表会」で構成されます。授業は一年間を通じて行われ、「企業実習」だけでは単位取得はできません。

「事前教育」では、キャリアデザイン・同演習、就職支援プログラムと連携して、ビジネスマインドの涵養や実習先選択、企業実習に必要な基礎的知識とスキルを習得し、各自が企業実習に対する達成目標を設定します。具体的には

① ビジネスマナーや倫理教育などを行う「ビジネススキル講習」
② 自己分析、企業研究、進学検討などをおこなう「キャリア形成講習」
③ 「安全・衛生・品質管理講習」
④ 「時事・社会教育講習」

などが行われる予定です。

「事後教育」では、企業実習の振り返りとともに、就職支援プログラムと連携して進学・就職などの進路選択に必要な基礎的知識とスキルを習得し、各自の将来像を具現化するアクションプランを作成します。具体

的には、

① 実習を振り返り、アクションプラン作成を行う「ビジネススキル講習」

② 「OB 講演会」

などが行われる予定です。

「企業実習」は受講生・受託企業・大学との間で、信頼関係を築くために「覚え書」「誓約書」を取り交わした上で行われます。実習先では事故等以外にも情報漏洩等、細心の注意が必要です。単位修得には原則 10 日間 70 時間以上の実習時間が求められます。また建築工学科では原則夏季休暇期間中に行うこととしています。

これまで次のような企業での実習実績があります。

A) 建設会社：大規模工事の現場事務所で施工管理者と一緒になって現場管理実務の実際を学ぶ。

B) 設計事務所：設計業務に関する資料収集・模型製作を手伝いながら設計実務プロセスを学ぶ。

C) 工務店：現場監督とともに現場廻を行いながら、工事の着工から完成までのプロセスを学ぶ。

D) ハウスメーカー：住宅関連業務として、設計・積算・工事管理、生産システムの管理等を学ぶ。

E) 行政機関：地方行政の現場において産業育成から人材ネットワークに至る基礎業務を学ぶ。

F) 文化財保護の研究所等：文化財の修理現場で、解体・修復の記録を手伝いながら実物に触れて文化財保護の様子を学ぶ。

G) NPO・業界団体等：まちづくり、建設産業の人材育成、海外技術移転、住宅関連事務局において業務を手伝いながら業界の様子を学ぶ。

以上の外にも、様々な企業で実習が行われてきました。実習は学科から紹介する「公募企業」だけでなく、自分で実習先を見つけてくる「自己開拓企業」でも可能です。

実習の成果は報告書としてまとめ、また「発表会」でプレゼンテーションを行います。この時、自身の実習を振り返るのとの同時に、他の受講生の発表を通して、企業経験を共有します。

■ 他コース設置科目の受講について

① 卒業要件に含めることができる単位数は、キャンパスガイドを参照してください。

② 担当教員の許可を得なければ受講できません。

③ 居住空間デザインコース設置科目については、他コースの学生は受講できません。

■ 転コースについて

① 居住空間デザインコースへの転コースはできません。

② 居住空間デザインコースからの転コースは、1 年次から２年次への進級時のみ可能です。建築デザインコースからの転コースは、２年次から３年次への進級時のみ可能です。

③ 転コースは、希望するコースの適性審査を受けて許可されます。

Ⅱ．大学院について

近年の建築学のめざましい進歩、発展、建築生産の複雑化、多角化は、学部の教育をごく基礎的、初歩的なものとしており、より高度な専門教育は大学院にゆだねざるを得ないのが実状です。

大学院には博士前期課程（2 年間）と博士後期課程（3 年間）があります。博士前期課程を修了すると修士（工学）の学位を授与されます。博士後期課程を修了し、博士論文の審査に合格しますと、博士（工学）の学位を授与されます。

博士前期課程は、実学教育の理念に根ざし、建築工学に関わる専門基礎知識、及び一般教養を基にして、社会の要請に十分応え得る建築技術者・デザイナーを養成するために、優れた総合能力と高度な実学専門知識を、建築分野の各領域の研究を通し習得することを目的としています。

博士後期課程は、より高度、かつ普遍性を有する建築工学に関わる専門的知見を、創造的な学術研究を通し明らかにすることにより、建築工学分野の発展に資すると共に建築界において指導的かつ実践能力に優れたスペシャリストを養成することを目的としています。

大学院生になるには入学試験があります。これには学内推薦、学内特別推薦、一般入学試験、社会人特別選抜の 3 種類があります。年 2 回（7 月と翌年 3 月）入学試験がありますので専攻の先生方に相談して下さい。

大学院生産工学研究科建築工学専攻における教員には、十分諸君の期待にこたえられる陣容を配し、研究分野においてもほぼ建築工学の範囲を網羅しています。また研究施設においてもⅦ.「建築工学科の研究室および施設」に見られるように充足が図られています。大学院生はこのような環境の中で着実にその成果をあげ、社会的な認識も高まり、就職の面でも好結果をもたらし、特に大学院修了でなければ採用しないという職種もあらわれてきています。本専攻博士前期課程修了者は、建設業、設計事務所、民間コンサルタント、研究機関、材料メーカー、ハウスメーカー、設備関連企業、国および地方公務員、出版・ジャーナリズム関係、大学・高校教員など幅広い分野で活躍しています。後期課程修了者は主に、大学および大学の研究機関、民間企業の研究機関、コンサルタント会社などが活躍の場となります。

大学院には様々な奨学金制度があり本人の強い研究・学習意欲があれば経済的な問題は克服することが容易です。

Ⅲ．建築関係の図書蔵書紹介

本学の図書館は、津田沼、実籾両キャンパスにあり、蔵書数は両図書館で雑誌類の約 1600 タイトルを含め約 24 万冊になります。その内、建築関係の専門書籍は約 3 万冊あります。また、書籍類以外には、ビデオソフト・DVD 等の視聴覚用教材資料も備えてあります。実籾キャンパスの方は、昭和 56 年 12 月に図書館が完成しましたので、現在は蔵書数を増やしつつ、一年生諸君への閲覧サービスを行っています。なお、津田沼キャンパスの図書館には、書籍類以外にゼミナール、大学院講義、研究のためのグループ学習室などが用意されていますので大いに利用してください。

図書の借用

本を借りるには、学生証が必要です。図書館の利用方法については、「図書館利用案内」および「キャンパスガイド」の生活編に詳しく記載されていますので参照して下さい。

東邦大学習志野メディアセンター・千葉工業大学図書館利用について

1）入館手続

学生証の提示により利用できます。

2）利用できるサービス

館内閲覧、複写（有料）、図書の貸出。

※貸出には、各図書館での利用者登録が必要です。

検索システム

本の検索には、欲しい本が瞬時に検索できるシステムとして NUNSY（Nihon University reference information Network System）OPAC（オンライン目録検索システム）が用意されています。

求める資料が見つからないとき、知りたい事項について調べ方が分からないとき、あるいは図書館の利用方法等で困ったときは図書館カウンターに相談して下さい。

ホームページ URL

http://www.lib.cit.nihon-u.ac.jp/

幅広い知識を身に付け、さらに創造力を涵養するには、講義を聴くだけでなく、図書館を効果的に利用することが必要です。そこで最後に、建築工学科の学生諸君に勧めたい和洋雑誌およびビデオソフト・DVD のリストを下記に挙げておきますので、講義の合い間あるいは放課後に多くの学生諸君が利用されることを望みます。

【欧文誌】

ASHRAE Journal, Architectural Design, Architectural Record, L'Architecture aujourd'hui, Architectural review, Casabella, Journal of wind engineering and industrial aerodynamics, Structural Journal, Materials and structures, Japan Architect, Domus, Journal of Sound Uibration

【和文誌】

建築画報、建築技術、建築雑誌、建築設備、建築知識、A+U、建築と社会、建築ジャーナル、空気調和・衛生工学、公共建築、商店建築、住宅建築、新建築　住宅特集、GA document、GA Japan、新都市、施工、セメントコンクリート、ディテール、デザインの現場、都市計画、近代建築、日経アーキテクチュア、都市問題、建築設備士、建築設備と配管工事、建築と積算、設備と管理、防水ジャーナル、建設統計年報

【ビデオソフト・DVD】

放送大学ビデオ教材（環境科学、環境アセスメント、環境の健康科学、エネルギー工学と産業・科学、集合住宅計画の変遷、住まいと環境)、現代建築家シリーズ（ル・コル、ビュジェ、フランク・ロイド・ライト、ミース・ファン・デル・ローエ、ルイス・カーン　ほか)、日本建築画像大系（メガストラクチャ、京民のための災害情報、地域冷暖房、京大工)、建築基礎入門、建築工事の施工計画と施工管理、世界の家、日本の美（桂離宮、東照宮、二条城)、寺社建築講座、京数寄屋の名印、建築家 70 年の歩み、エアードーム、フラット・スラブ工法、今日の建築技術、現代パースの着彩テクニック、スリット式耐震壁、ソーラービル、超高層ビルの耐震設計、省エネルギー建築、新宿新都市とカーテンウォール

Ⅳ．就職

1．取り組みと志望動機

建築工学科を志望された皆さんは、まず「建築」という職能、職業の性格をよく理解してください。「建築」が製造業や商社の他産業と著しく異なる点は、つくられるものがつねに「人」と「物」の両面にかかわりながらつくられることです。「人」とのかかわりについては、直接は建築主や様々な請負業者などの人たちとの多彩な人間関係から始まりますが、背景には人生観や生き方、価値観、社会性といった、人間性を理解する必要性が存在しています。また「物」とは、よい建築をつくるための技術や材料とのかかわりですが、背景にはコンピュータ、ＩＴや新素材等の、先端技術への理解の必要性が含まれています。

今までこうした建築を支えてきた分野は「男性社会」だったわけですが、ここ数年来著しい変化を見せています。社会での女性の持つ役割が理解され、女性でなければ出来ない独自の分野が定着しはじめたことです。これは、専門家としての女性の独自の立場、感性や物の見方が強く社会的に要求されたからにほかなりません。これから社会に出るあなた方の努力と熱意、感性によって、多種多様な分野、新しい領域が開拓されることを自覚する必要があると思われます。

いずれにせよ、建築工学科を卒業した諸君の職場は受け身なサラリーマン的生活ではすまない世界であって、こうした姿勢で仕事に取り組むと、周囲の人々の迷惑になるばかりか、自分自身をもスポイルすることになることに注意してください。「建築」という職業を人生の伴侶としていくには、どの分野を希望するにせよ、時間的にも肉体的、精神的にもハードなものを要求され、それに耐え得る様々な努力が欠かせないことを理解してください。現状では、就職希望者に対しての求人は、学校推薦と自由応募を合わせて充足していますが、希望職種の求人が必ずしもあるとは限りません。また、現在の社会・経済、建設不況のあおりは、求人状況にも顕著に表れています。また自分の適性にもとづいて企業を選ぶのは早い段階から相当の努力が必要です。過去の例からみても、早い時期に方針を明確にした者ほど、自分の望む企業に進むことができるというケースが多くなっています。このように、将来にわたる進路決定においては、早すぎて悪いということはありません。

したがって、３年次前半位までに自分が何をやりたいか、何ができるかという自己の適性と意欲をよく見きわめてください。３年次後半で自己の進路に適した分野をしぼり情報を集め評価して、いくつかの企業をしぼる等の努力が必要です。最近の傾向で、企業の求人活動が大変早くなりつつありますから、４年次になる前から具体的な就職活動が始まるものと考えてよいでしょう。資料だけでなく、企業について先輩を訪問して内容をたずねる等の就職活動に取り組む必要があるでしょう。

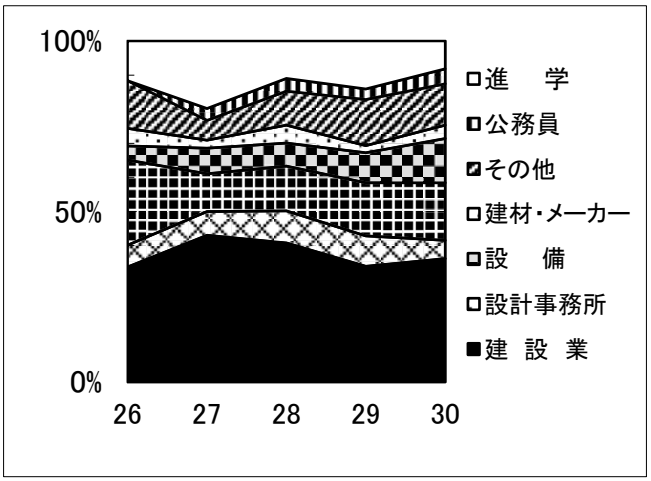
４年次になってもまだ志望分野について結論が出ないというのでは遅すぎるといえるでしょう。建築の分野は極めて広範囲なため、自らの適性に合う分野が必ずありますので、冷静に評価決定できる時間的余裕と精神的なゆとりを持ってください。安易な考えにより選択することは、自分のみならず周辺に大きな迷惑をかけることになるので注意しましょう。

2．最近の就職状況とアドバイス

最近（平成 26 年度～30 年度）の卒業生の進路の構成はグラフ（図Ⅳ－２）に示してあるので、参考にして下さい。

就職に関して、現状（令和２年１月１日現在）の内定者内訳では、最も多い業種は総合建設業（ゼネコン）での施工・設計等で 28%、次いで住宅・不動産関係 13%、設計事務所 8%、設備関係 4%、材料・メーカー等 2%、となっております。その他の 9%には、公務員や関係団体等の様々な分野が含まれており、建築を学んだ学生の就職先として次第に多様化する様相を示しています。

なお、女性のみでは約 9 割が就職希望、その内定者の内訳は総合建設業 17%、住宅・不動産関係 17%、設計事務所 11%、設備関係 6%、材料・メーカー等 4%、その他 11%となっております。



図Ⅳ-2　就職先の業種別割合の推移(平成)

●　総合建設業(ゼネコン)を目ざす人へ

ゼネコンは大別すると施工部門と設計部門とがあります。設計部門は、ゼネコンでは施工部門の支援機能を有します。この性格からみてわかるように、いわばサービス機構の一端を担います。設計部門には、デザインの分野と構造・設備等の分野とがありますが、特にデザイン分野は希望すれば誰でも入れるというわけではなく、その人のデザイン能力が厳しく審査されることになるので、希望する者は自己 PR の出来る自信のある作品をまとめた作品集（ポートフォリオ）を準備しておく必要があるでしょう。

施工部門は、ゼネコンの主幹部門に当たっています。人間関係が重視されるため、人柄、リーダーシップが重視され、面接試験が中心になっています。時間的拘束等により施工部門は敬遠される傾向もみられていましたが、近年、就職先として施工部門を目指す学生も多く、また多くの先輩方も活躍しており、総合的な建築技術の実力と知識を身につける上で最も適した分野といえます。

●　設計事務所を目ざす人へ

この分野は将来、設計の能力を身につけた上で、自身で設計事務所を主宰したいと考えている人にとっては最も適した分野です。一般にこの種の事務所は企業として小規模で、経営者（建築家）の個性や思想が所内に行きわたっており、その考え方や姿勢と自分の求めているものがマッチするかどうかがポイントになります。従って、大学への求人に応ずるだけでなく、先輩の紹介、雑誌や作品集等から対象となる事務所を自分で見つけ出し積極的に出向いて、経営者（建築家）の人柄、事務所の雰囲気や作品にふれ、自分の性格等のバランスを考慮した上で絞り込み、選択する必要があります。併せて、就職活動では、自分の作品をまとめた自己を表現する作品集（ポートフォリオ）を用意する必要があります。

設計事務所として一番多いのはデザイン系の事務所ですが、建築設計に関わる業務は多岐にわたり、設計事務所は多様化が進んでおり、積算、構造、設備、音響、ランドスケープ、企画・コンサルタント事務所等、今後益々機能分割化する傾向がみられます。

●　住宅産業、不動産関係を目ざす人へ

この分野は年々希望者が増えています。仕事の内容はそれぞれの会社によってかなり異なりますが、住宅産業では、住宅設計、施工、営業といった内容を担い、営業からはじまって、設計、施工監理といった分野までの一貫した仕事を任されるケースが多いようです。いずれにしても接客中心の仕事が多く、人間関係が苦手なタイプの人には不向きです。また、住宅インテリアの分野は、今後女性の活躍が最も期待される分野の一つといえるでしょう。

不動産部門は、本来不動産販売が中心でしたが、最近ではデベロッパーとして街づくり等の大規模な総合プロジェクトを手がけるようになってきています。しかし、それだけに広範囲わたる専門知識が要求されると共に、コンサルタントや企画、マネージメントの仕事が中心になります。

●　材料、設備関係を目ざす人へ

材料分野は、研究開発とセールスエンジニアが主な仕事になっています。研究開発は学究的な人に向く分野であり、大学院生の就職が多く見られます。

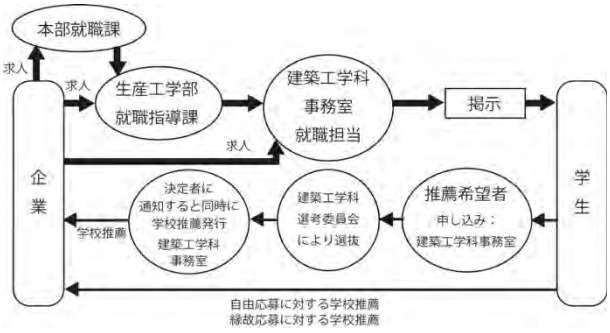
設備分野は、最近の建築では建設費の中に占める割合が 30～70％と極めて大きくなる傾向にあり、また環境共生等の観点からも期待されている分野です。

● 官公庁を目ざす人へ

希望者は比較的多いものの採用は少なく狭き門になっています。国家公務員になるためには、公務員試験に合格する必要があり、そのために本学部では希望者を対象とした公務員対策講座が毎年行われ、公務員希望者のニーズに対応しています。地方公務員はそれぞれ独自の採用試験が行われていますが、かなり難しいのが実情です。仕事の面では建築の現場に触れるチャンスはあまりなく、デスクワークの行政分野が中心になります。また、採用試験の時期が一般企業より遅い場合が多いので、就職活動を行うタイミング上でずれ込むことがあることも覚えておいてください。

● その他の分野を目ざす人へ

建築はさまざまな関係分野が多岐にわたり、ますます多様化しています。特にインテリア分野はきわめて多様で、住宅設備、店舗設備、内装、家具、照明等の企業が総合インテリアを目ざしており、今後女性を中心に最も期待される分野といえます。この他、すでに完成した建物の維持管理のための技術、いわゆるメンテナンス部門は、景気に影響されない分野として今後ますます発展性が望まれる分野です。また、コンピューターソフト関係企業においても建築の専門知識が必要とされ、若干ですが毎年応募者の出る分野です。更に、電鉄、鉄道、大手の各種製造会社が自社施設の設計管理を行う部門を企業として独立させ、様々な設計や施工を行うほか、地域開発等のデベロッパーとしての機能を果たす等、都市空間から地域空間に関わる新しい動きがみられます。



就職試験までの流れ

● 女性の就職について

従来男性社会であった建築の分野で、あらゆる範囲のあらゆる職種に、女性の姿が見られるようになり、その数も年々増えてきました。

みなさんは今、一生建築の仕事を続けたいと思っているでしょう。それにはまず、建築が好きになることが第一ですが、女性はそのほかに次のようなことが必要です。学生時代に建築の実力を養うこと。社会的な視点を持つ。甘えない人間関係。健康な生活態度。就職にあたっては、2、3 年単位で考えず、長い目で職能、職業生活を見通してください。

● 大学院を目ざす人

大学院に進学する人は年々増えています。大学院の就職は、最近は特に高い評価を受けるようになりました。したがって企業においても、大学院修了生を専門家として受け入れるようになり、大学院で専攻した専門分野を活用し自身の能力を発揮出来るようになり、同時に社会の要求は高まりつつあるといえます。

3. 建築工学科での対応

建築工学科では、2 名の就職委員を置いて進路相談に応じている他、学生と企業の仲立ちとなるシステムをつくり就職活動に対応しています。また各分野の企業に関する資料や情報が建築事務室に備えられており、専任の事務担当者が常駐し、就職活動について様々な支援を行っていますので活用してください。なお、就職に関するいろいろな手続きに関しては、３・４年次においてガイダンスを行います。

例年 12 月～1 月には、企業の就職担当者（リクルーター）に来校していただき、建築工学科において会社説明会・面談等を実施しています。（対象：3 年生・大学院 1 年生）また、３月頃には生産工学部主催の就職セミナー（全学科共通）も案内されます。

※建築工学科では、就職の資料及び就職のアドバイス等を就職委員の先生によって提供しています。

Ⅴ．卒業後の資格

受験資格が得られる国家試験の資格は、先ず、一級建築士・二級建築士が有ります。更に、施工管理技士、建築設備士等の専門的分野の資格取得への道が開かれています。

このように建築に直接関連する資格と建築に付随する分野での資格も数多くあります。

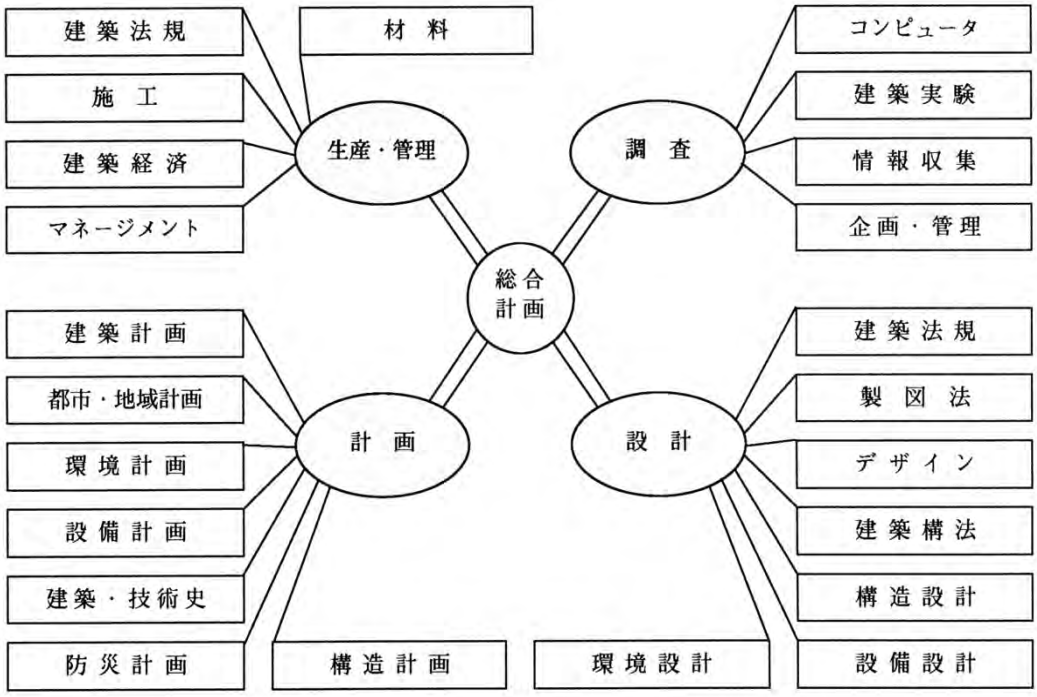
例えば、測量士、測量士補や宅地建物取引士、土地家屋調査士、不動産鑑定士といった土地や建物を対象とした資格取得が可能であり、とくにコンクリート技士、コンクリート主任技士といった大学の土木工学科、建築工学科を卒業した者に与えられる受験資格もあります。

その他に建築物の環境や労働環境等の衛生管理の為の資格、衛生管理者、建築物環境衛生管理技術者等があり、消防設備士、公害防止管理者といった一般的な資格取得も卒業後の実務経験によって可能であります。

近年設けられたインテリアプランナー制度によって認定されているインテリアプランナーやインテリアコーディネーターの資格があり、専門家としての今後の活躍が期待されています。

又、技術分野の最高ランクの技術士、技術士補の資格は、調査・計画・研究・設計・分析・試験又は評価の業務及びコンサルタントの指導業務を行う者として高い評価を受けています。

なお、一級建築士、二級建築士を受験するためには必ず取得していなければならない分野と科目数が決まっています。別途配布される一級建築士受験指定科目一覧を、各自で必ずチェックして取得不足のないようにしてください。



建築工学科を卒業後の進路となるフィールド一覧

	資　格　概　要
技術士 （補）	技術士法に基づいて認定される国家資格。技術系では極めて高い評価を与えられている資格で、機械部門、建設部門、衛生工学部門など 18 部門からなる。技術士となるためには、まず 1 次試験に合格して技術士補となり、必要な経験を積んだ後、2 次試験を受けて合格しなければならない。 所定の部門の一定の科目を選択して技術士または技術士補となれば、下記の表のように建設業法による一般建設業・特定建設業の許可基準の一つである営業所ごとの専任の技術者、工事現場の主任技術者、監理技術者として認められる。また、建設部門の技術士になれば、労働安全コンサルタントの筆記試験の一部、一級土木施工管理技士、一級電気工事施工管理技士・一級造園施工管理技士の学科試験、土地区画整理士の第 1 次試験をそれぞれ免除されるなど、他の国家資格取得上の特典がある。
一級建築士	昭和 25 年の建築士法制定とともに誕生したこの資格も、すでに 60 年が経過し、現在までの登録者は 33 万人近くに達している。「足の裏の米粒」などと揶揄する声も聞かれるが、学校や延べ面積 500 ㎡以上の病院や劇場など一級建築士でなければ設計・工事監理をすることができない建築物は多く、建築の仕事に携わる者はやはり取得しておきたい資格である。 なお平成 20 年 11 月 28 日より建築士法が改正され、受験資格要件が大幅に変更となった。従来の「所定の学校の課程を修めて卒業後、所定の実務経験」から「国土交通大臣が指定する建築に関する科目（以下「指定科目」という。）を修めて卒業後、所定の実務経験」になり、指定科目を修得しなければならなくなった。指定科目は当学科では既に申請確認済で、そのリストは別途ガイダンスで配布する。 更に令和２年から建築士試験の受験要件が変わり、新しい建築士制度がスタートした。従来受験要件だった実務経験が免許登録要件に改定され、大学卒業後すぐに受験できるようになった。更に実務経験の対象実務の見直し（緩和）、学科免除の仕組みの見直しが行われている。 設計や工事監理のほかにも建築工事契約に関する事務、建築工事の指導監督、建築物に関する調査または鑑定など（建築士法 21 条）、その守備範囲は広い。また建設業法では、建築業の許可を受ける際には、その営業所ごとに専任の技術者を置かなければならないと規定され（同法 7 条 2 号、15 条 2 号）、工事現場には工事の施工の技術上の管理を司る主任技術者を置かなければならないと規定している（同法 26 条 1 項、2 項）が、一級建築士は、建築工事業、大工工事業など一定の建設業において、これらの専任技術者になることができる。 他資格に関する優遇措置も多く、土地家屋調査士、技能士のうち建築大工・ブロック建築・枠組壁建築、建築設備士、建築物環境衛生管理技術者、建築施工管理技士、消防設備点検資格者、建築主事資格で学科試験の一部または全部を免除されたり、受験受講資格を認められたりする特典がある。
構造設計一級建築士 設備設計一級建築士	新建築士法（平成 20 年 11 月 28 日施行）では、構造設計一級建築士制度・設備設計一級建築士が新たに創設され、高度な専門能力を必要とする一定規模以上の建築物の構造設計・設備設計については、構造設計・設備設計一級建築士が自ら設計を行うか若しくは構造設計・設備設計一級建築士に構造関係規定・設備関係規定への適合性の確認を受けることが義務付けられることとなった。 資格を取得するには、原則として、一級建築士として 5 年以上構造設計・設備設計の業務に従事した後、国土交通大臣の登録を受けた登録講習機関が行う講習の課程を修了することが必要。
建築構造士	‘93 年度から始まった資格で、構造の設計・監理の高度な技量と資質を有する構造設計者を認定するもの。認定試験に合格し登録する。
土地家屋調査士	土地家屋調査士法に基づいて認定される国家資格。他人の依頼を受けて、不動産の表示に関する登記につき、必要な土地または家屋に関する調査、測量、申請手続きまたは審査請求の手続きをすることがその主な業務。建築との絡みは大きく、設計者でもこの資格を取得する者は多い。1、2 次試験を受け、その合格者がさらに口述試験にパスすると資格が取得できる。

	資　格　概　要
建築施工管理技士	建設業法 27 条に基づいて認定される国家資格。建築一式工事の実施に当たり、施工計画、施工図の作成、工程管理、品質管理、安全管理など工事の施工の管理を的確に行うために必要な技術を検定する試験に合格すると資格が与えられる。一級と二級があり、一級は特定建設業のうち建築工事業（指定建設業)、大工工事業、左官工事業など 16 種の工事の監理技術者、専任技術者となることができる。 二級は、建築、躯体、仕上げの 3 種別があり、「建築」は建築一式工事の、「躯体」は大工工事、鉄筋工事など 5 種類の工事の、また「仕上げ」は大工工事、左官工事など 12 種類の工事の主任技術者となることができる。
ｺﾝｸﾘｰﾄ(主任)技士	技士と主任技士の 2 種類があり、技士はコンクリートの製造、施工、試験、検査、管理などを、主任技士はコンクリートの製造、工事および研究における計画、管理、指導などを実施する能力のある技術者とされている。
建築設備資格者（建築設備士）	建築設備全般の知識、技能を有し、建築士に対して建築設備の設計・工事監理の適切なアドバイスが行える者に対して与えられる。建築士法 20 条 3 項に、建築士は大規模の建築物などの建築設備について資格者の意見を聴いたときにはその旨を明らかにしなければならないとあるが、この資格者が建築設備資格者である（昭和 60 年建設省告示第 1526 号）
設備士	空調、給排水、衛生設備の設計・工事監理、環境衛生管理および調査などを行う。民間資格だが、建築設備資格者の試験においては、一級建築士や一級管工事施工監理技士と同等の受験資格が与えられる。
インテリアプランナー	インテリアの企画・設計・工事監理について一定の知識、技能を有する者に与えられる。業務独占を伴うものではないが、資格授与のレベルは「一級建築士と同等程度」とされ、住宅金融公庫の「インテリア工事特別加算額融資」は当資格者が作成した計画書を必要とする。また、マンションリフォームマネージャー資格試験や高校のインテリア科教員資格認定試験では、一定の受験科目を免除される特典もある。
再開発プランナー	都市再開発事業に関わる企画、事業計画の作成、権利調整などに従事する者の知識と技術を認定するものとして平成 4 年に創設された資格。建設大臣認定の公的な資格である。土地の高度利用と都市機能の更新のために、建築物とその敷地の整備を権利変換その他の権利調整手法により行う都市再開発事業のコンサルタント業務を行う。
建築積算資格者	建築の積算業務に携わる技術者を対象として、専門の知識や技能について認定するもの。平成 2 年に建設大臣の認定資格となり、今後の活用が期待されている。

Ⅵ. カウンセリング

学生支援室・カウンセラー室

学生生活を充実させ有意義にするために、本学部では学生支援室・カウンセラー室を設置しています。

あなたの学生生活全般にわたる相談について、まずコーディネーターが応じます。そしてお話を伺いながら，内容に応じてカウンセラーや教員インテーカー、保健室、学生課などと一緒に対応を考えていきます。学生支援室の開室時間等はキャンパスガイドを参照してください。電話相談にも応じています。

■津田沼キャンパス（１号館１階）

学生支援室：047(474)2229 ｶｳﾝｾﾗｰ室:047(474)2245

■実籾キャンパス（１号館１階）

カウンセラー室：047(474)2812

クラス担任・教科担当教員

学生支援室での相談に加え、普段学習を共にしている身近な教員が相談に応じる、きめ細かなサポート体制を整えています。これが教科担当の教員によるクラス担任制度です。クラス担任とは、学科ごとに各学年３名ほどの教員を割り当て、その学年の学生の様々な相談ごとなどに対応します。その他 1、２年次には１年次の自主創造の基礎１・２の担当教員が、３年次はゼミナール AB、4 年次は卒業研究の担当教員が身近な相談の役割を担っています。

クラス担任と教科担当の教員は、普段はそれぞれの研究室に在室します。相談を希望する場合は、教員の研究室に直接出向くか内線電話を利用して連絡するなどして、まず相談の約束を取ることが望ましいと思います。でもそうもいかない場合は、建築事務室を通じて相談したり、まず学生支援室に相談したりすることもよいと思います。

このように、学生支援室、クラス担任教員、そして教科担当教員が連携して、皆さんの抱える問題の解決にあたります。

相談事は、例えば、

① 学習に関する問題：例えば、履修や再履修など、大学院進学、留学などの問題

② 経済的な問題：学費支払い、奨学金などの問題（制度の理解、手続きなどの問題）

③ 自分自身や人に関する問題：健康に関する悩み、精神的な問題、友人の問題、家庭の問題など

④ 学外活動に関する問題：例えばクラブ活動、アルバイトや広く学外での問題など

が多いと思いますが、これ以外にも、心に何かが詰まったら、すぐに相談をしてくれるとよいと思います。

一人で悩まずに、早めに相談することが、問題解決への近道です。あなた方の相談は、いずれも大切に扱われます。適切な情報やアドバイスを受けることができるはずです。

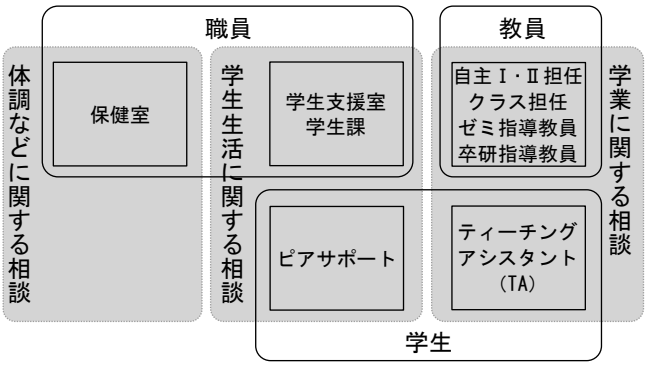
ピアサポーター

平成 22 年度よりキャンパスに不慣れな 1 年次の学生生活をサポートするために、先輩上級生が手助けするピアサポーター制度を導入しています。どんなに小さな相談事でも気軽に声をかけられるように、と考えられた制度です。これを発展させ、平成 29 年度より、1 年生だけではなく、１～３年生の学生生活支援・修学支援・キャリアサポートも、ピアサポーターが担うようになりました。低学年だけでなく上級生も、この制度を活用して、身の回りの問題を解決していけるとよいと思います。

健康診断・保健室

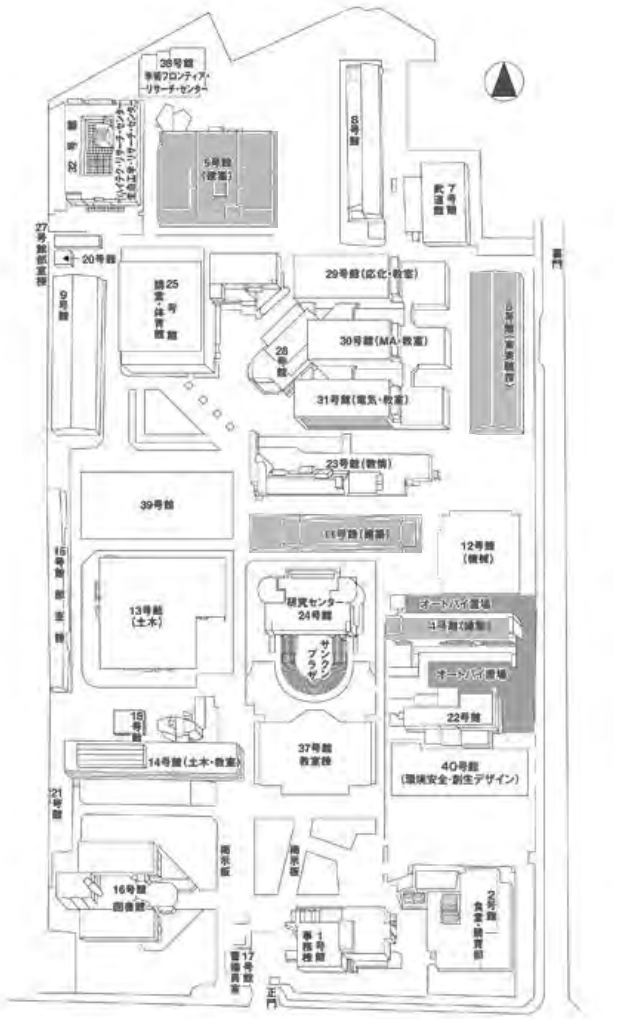
本学では毎年 4 月に定期健康診断（「学校保健安全法」で受診が義務付けられています）を実施します。保健室は、日頃の軽微な疾病、負傷等の応急手当や一時的な静養に対応しています。校医による健康相談も行います。これらについては、キャンパスガイドの記載事項を参照してください。

健康は学生生活を送る上での必要条件です。



Ⅶ. 建築工学科の研究室および施設案内

建築工学科が使用している学内施設は、4 号館 1 階～4 階、5 号館 1 階～4 階、6 号館（東実験棟南側）、11 号館（通称シェル実験棟）、および 22 号館（風洞実験室）です。



■建築工学科の主な設備

構造設計関係実験設備（11 号館　、6 号館）

◎5000kN 及び 2000kN 構造物試験機（11 号館）–最大加力 5000kN と 2000kN のものがあり、鉄筋コンクリート造、鉄骨造、木質構造などの耐力を調べる装置です。

◎サーボパルサ装置（6 号館）–建築構造物に繰り返し荷重を加え、その強度特性を調べます。3 台のジャッキにより多方向から荷重をかけることができ、コンピュータ自動制御となっています。

◎ 1000kN 万能試験機（6 号館）–建築構造材料および部材の引張試験、圧縮試験、曲げ試験を行います。

5000kN 構造物試験機（11 号館）

地盤工学関係実験設備（5 号館 101、104、105 号室）

◎振動三軸圧縮試験機–地盤の中の力関係を土の要素レベルで再現し、地震や建築物などによる力が加わったときの土の強さを調べます。

◎加圧土槽–地盤中の圧力を模型地盤で再現し、建物基礎の支持力や沈下などの特性を調べます。

振動三軸圧縮試験機

風洞関係実験設備（22 号館）

風と建物などの相互関係を調べる 2 台の大型風洞実験装置があります。

◎ゲッチンゲン型風洞装置–建物に加えられる風圧力や風による振動などを調べます。（最大風速 60m/s）

◎境界層風洞装置–ビル風・風圧力・風による振動の性質を調べます。（最大風速 25m/s）

境界層風洞装置

環境設備関係実験設備(5 号館 1 階)

1)無音送排風装置　2）残響室１　3）残響室２

4）無響室　5）音響測定室　6）空気調和実験室

1）および 2）により空気調和設備のダクト系における損失圧力、流量配分、音響減衰および発生騒音を、2）および 3）により各種材料、工法、消音器などの透過損失を、3）により材料の吸音率、各種機器の発生騒音を、4）により音響模型実験、音響機器の校正、指向特性などを測定します。1）～4）室の測定は全て 5）で行います。6）では人体の熱的快適性、室内温熱環境などの研究を行います。

無 響 室

材料関係実験設備(5 号館1階)

◎強制二軸、強制一軸コンクリートミキサ：一般的な強度のコンクリートから超高強度コンクリートまで製造が可能なミキサです。

◎3000、2000、200ｋN 圧縮試験装置：コンクリートの圧縮強度を超高強度域まで試験することができます。

◎200、50ｋN 引張試験装置：材料の引張強度を試験することができます。

◎恒温恒湿室：コンクリートの製造、養生、試験を行う部屋で、－30℃から＋60℃まで制御できます。また、最大風速８m/sec の風で乾燥させることもできます。

◎水銀ポロシメーター：材料の nm オーダーの微細構造を測定する装置です。

◎走査電子顕微鏡（SEM）：材料の nm オーダーの組織を観察する装置で、X 線による元素分析も可能です。

◎凍結融解装置（Ａ法及びＢ法）：－50℃から＋60℃の範囲でコンクリートを凍結・融解させることができます。

◎中性化促進装置：コンクリートを恒温恒湿状況下で CO_2 により中性化させる装置です。

◎塩水浸漬・乾燥装置：恒温（＋５℃～＋50℃）下で、自動でコンクリートを所定の日数人工海水に浸漬させ、その後所定の日数乾燥させる装置です。

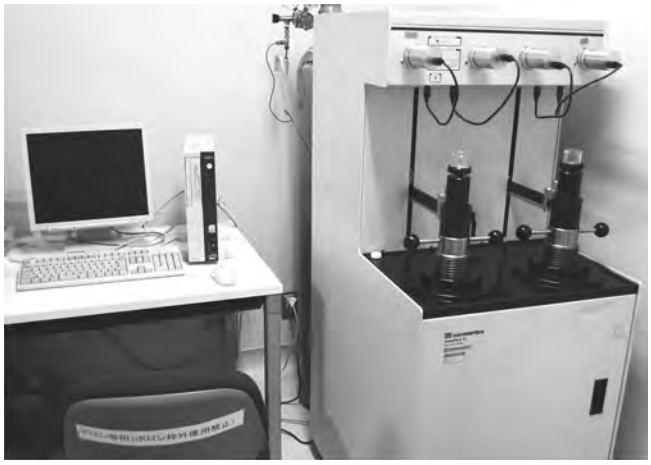
◎サンシャインウェザーメータ：恒温下で、水を噴霧し、紫外線を照査する装置で、材料の耐候性を試験します。

◎オートクレーブ養生槽：ALC 等の軽量気泡コンクリートを製造する高温高圧蒸気養生槽です。

◎各種材料品質評価装置：材料の含水率、透気性・透水性、気泡間隔、接触角、色差、光沢度を評価する装置等があります。

◎構造物の各種非破壊試験装置：コンクリート構造物の品質を評価する装置として、赤外線カメラ、鉄筋探査機、リバウンドハンマ等があります。

◎学外暴露場：北海道・泊、本学屋上、三宅島、鹿児島・霧島、沖縄・辺野喜に、単独あるいは他大と共同で運用している暴露場があり、気象観測データ、試験データを 10 分毎に研究室サーバに取り込むシステムも運用しています。

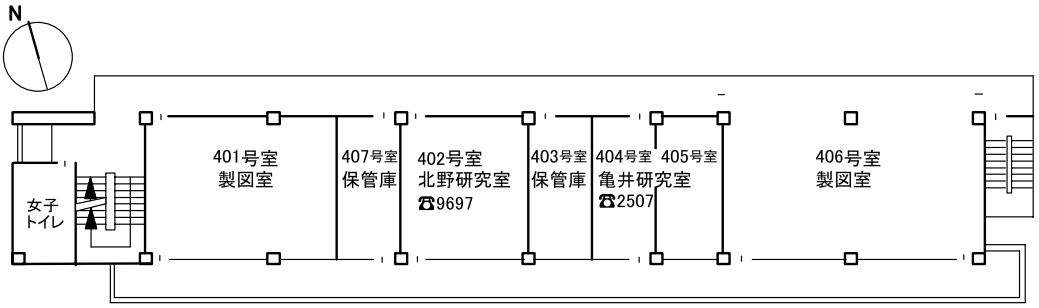


水銀ポロシメーター・走査電子顕微鏡（SEM）

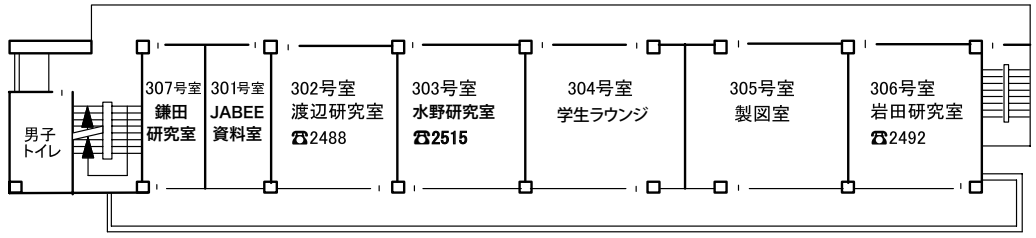
コンピュータ関係設備

学部の教育用コンピュータルーム（実籾校舎）と計算センター・画像情報センター・情報処理演習室（津田沼校舎 24 号館 2 階･3 階･4 階）を利用して下さい。

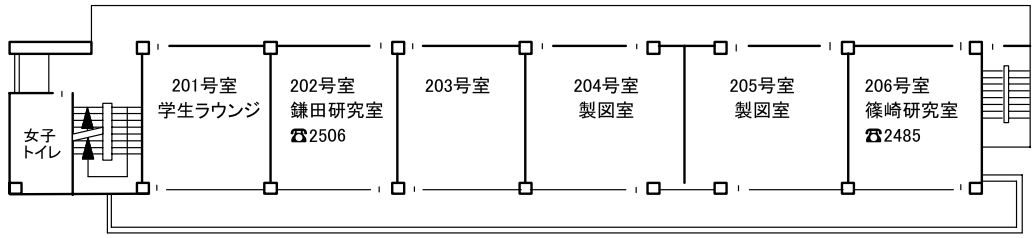
学部関係設備の詳細は、キャンパスガイドを参照して下さい。



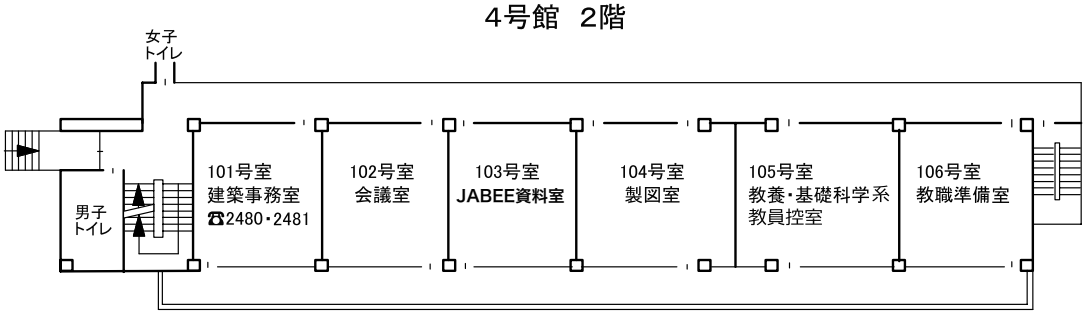
4号館　4階



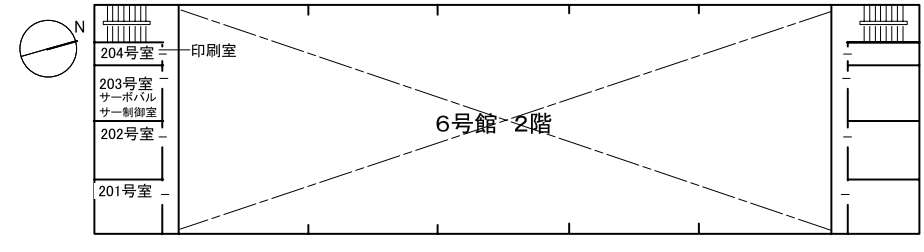
4号館　3階

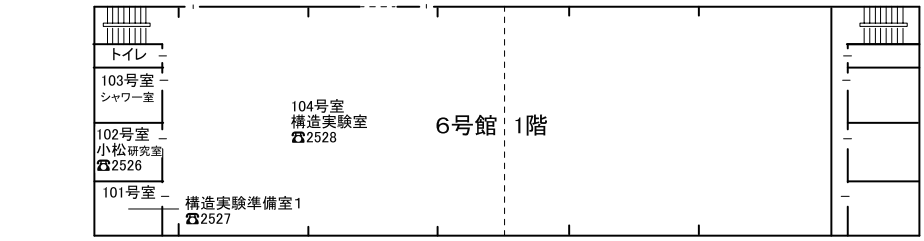


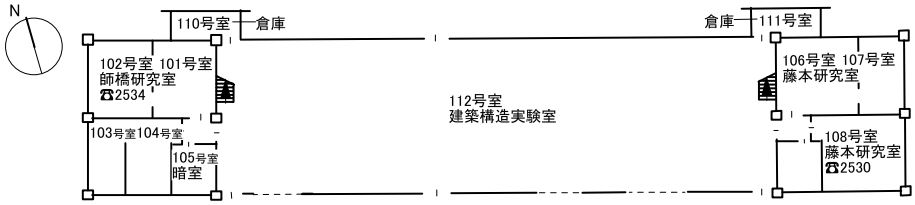
4号館　2階



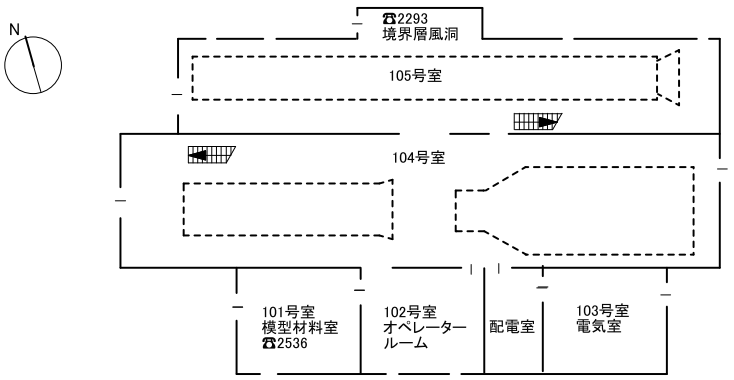
4号館　1階



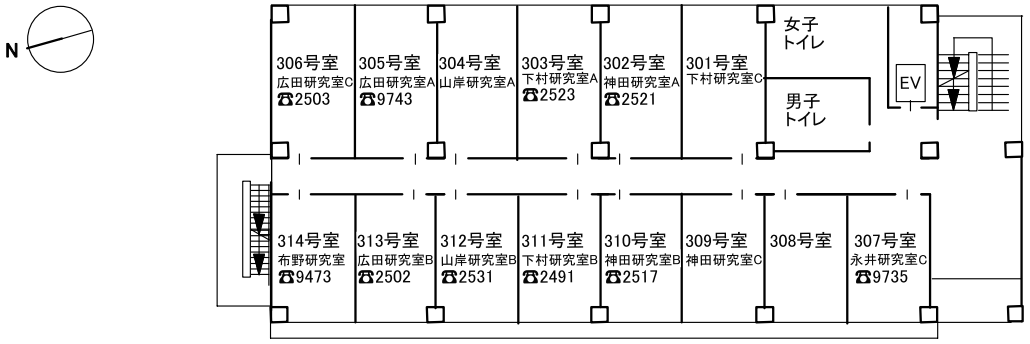




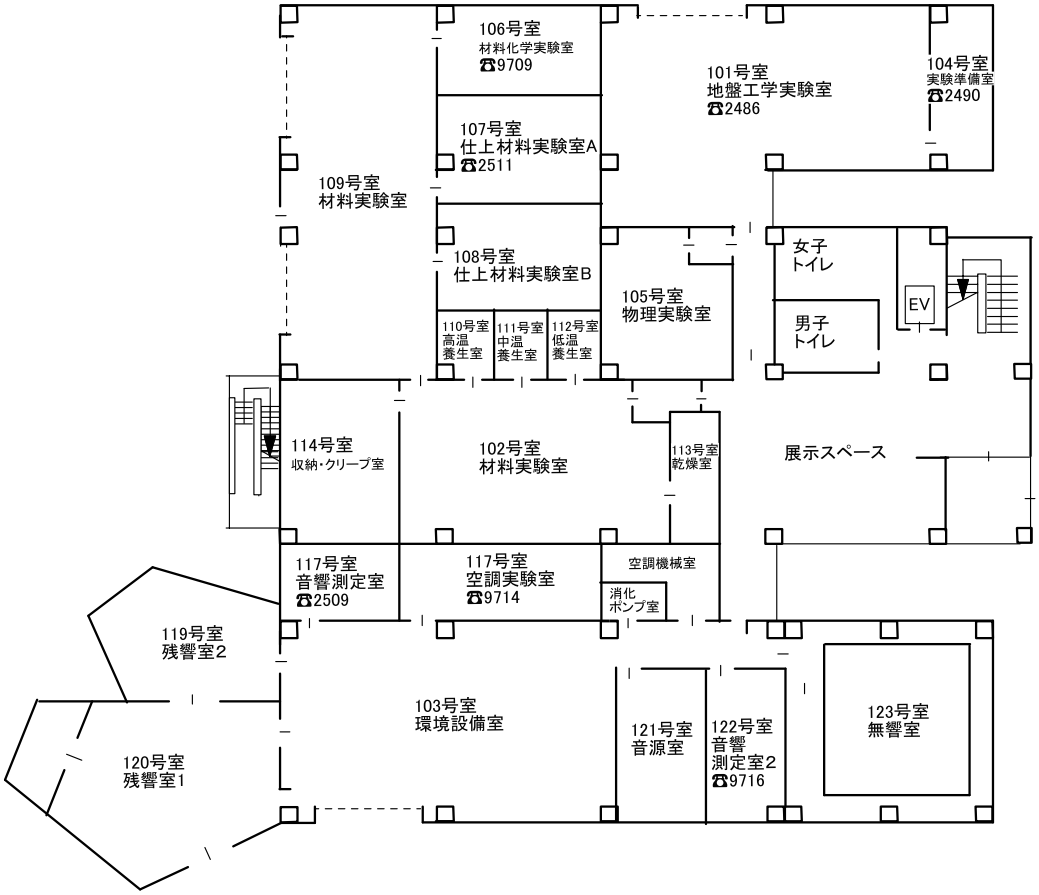
11号館 1階



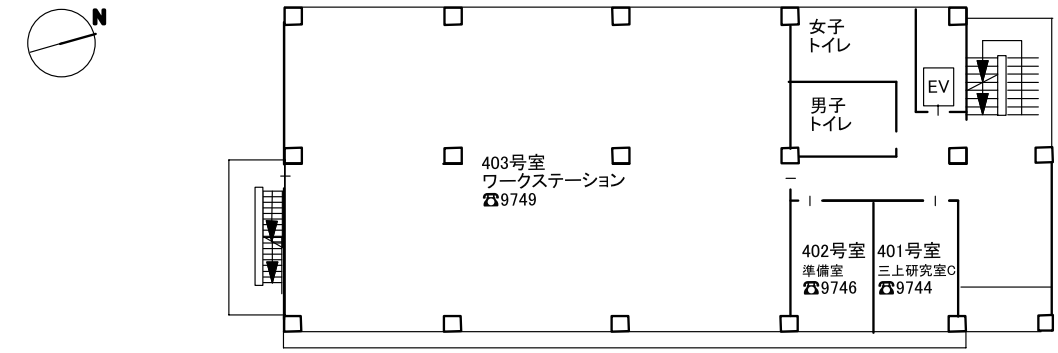
22号館 1階


N
306号室
広田研究室C
☎2503
305号室
広田研究室A
☎9743
304号室
山岸研究室A
303号室
下村研究室A
☎2523
302号室
神田研究室A
☎2521
301号室
下村研究室C
女子
トイレ
男子
トイレ
EV
314号室
布野研究室
☎9473
313号室
広田研究室B
☎2502
312号室
山岸研究室B
☎2531
311号室
下村研究室B
☎2491
310号室
神田研究室B
☎2517
309号室
神田研究室C
308号室
307号室
永井研究室C
☎9735

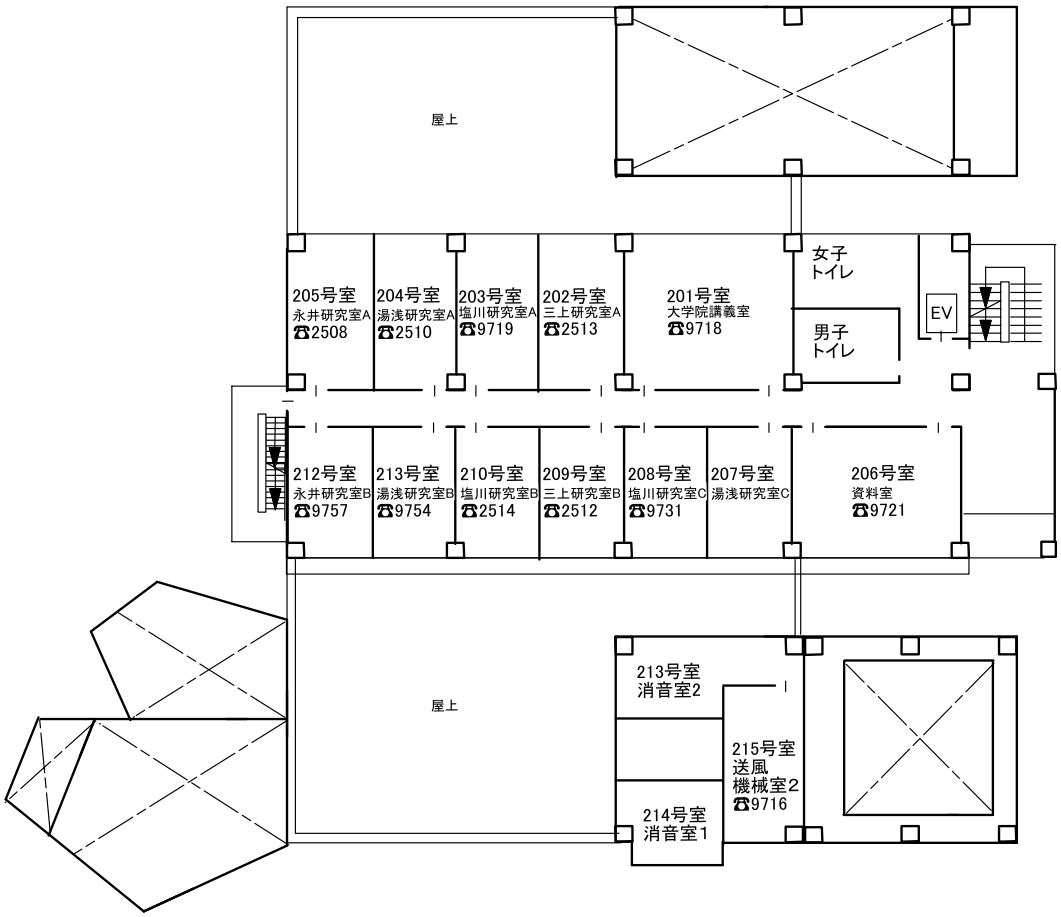
5号館　3階


106号室
材料化学実験室
☎9709
101号室
地盤工学実験室
☎2486
104号室
実験準備室
☎2490
107号室
仕上材料実験室A
☎2511
109号室
材料実験室
108号室
仕上材料実験室B
105号室
物理実験室
女子
トイレ
男子
トイレ
EV
110号室
高温
養生室
111号室
中温
養生室
112号室
低温
養生室
114号室
収納・クリーブ室
102号室
材料実験室
113号室
乾燥室
展示スペース
117号室
音響測定室
☎2509
117号室
空調実験室
☎9714
空調機械室
消化
ポンプ室
119号室
残響室2
120号室
残響室1
103号室
環境設備室
121号室
音源室
122号室
音響
測定室2
☎9716
123号室
無響室

5号館　1階


N
女子
トイレ
男子
トイレ
EV
403号室
ワークステーション
☎9749
402号室
準備室
☎9746
401号室
三上研究室C
☎9744

5号館　4階


屋上
205号室
永井研究室A
☎2508
204号室
湯浅研究室A
☎2510
203号室
塩川研究室A
☎9719
202号室
三上研究室A
☎2513
201号室
大学院講義室
☎9718
女子
トイレ
男子
トイレ
EV
212号室
永井研究室B
☎9757
213号室
湯浅研究室B
☎9754
210号室
塩川研究室B
☎2514
209号室
三上研究室B
☎2512
208号室
塩川研究室C
☎9731
207号室
湯浅研究室C
206号室
資料室
☎9721
屋上
213号室
消音室2
215号室
送風
機械室2
☎9716
214号室
消音室1

5号館　2階

Ⅷ. 建築工学科教職員の紹介

■ 教授

岩田（いわた） 伸一郎（しんいちろう）

部屋　4-306
研究テーマ
建築空間や都市環境の評価・計画手法
少子高齢化社会の住環境とコミュニティ

主な担当授業科目
自主創造の基礎１、建築設計Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ、総合設計、特別設計Ⅰ、計画科学

出身地　愛知県岡崎市
趣　味　映画

北野（きたの） 幸樹（こうき）

部屋　4-402
研究テーマ
余暇活動と建築・都市空間の相補関係
持続的まちづくり活動とコミュニティ活動
地域固有の人･活動･空間･時間の継承（SAD & CD）
主な担当授業科目
自主創造の基礎１、建築設計Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ、総合設計、都市計画

出身地　山梨県甲府市
趣　味　食すること・飲すること・心地よい睡眠

神田（かんだ） 亮（まこと）

部屋　5-302
研究テーマ
仕事率に基づく構造物の設計法に関する研究
構造物の制振装置の開発
構造物に作用する動的外力に関する研究
主な担当授業科目
自主創造の基礎２、総合設計

出身地　神奈川県横須賀市
趣　味　ヨット、旅、泳ぐこと

小松（こまつ） 博（ひろし）

部屋　6-102
研究テーマ
組立補剛を用いた山形鋼圧縮材の補強効果
金属材料と木材による合成構造に関する研究
再生コンクリートの合成構造への適用に関する研究
主な担当授業科目
自主創造の基礎１、建築応用力学、建築応用力学演習、鉄骨構造、鉄骨構造演習、建築実験Ⅰ、総合設計
出身地　東京都
趣　味　ゴルフ、食べ歩き

しおかわ　ひろよし
塩川 博義

部屋　5-210
研究テーマ
サウンドスケープに関する研究
うなりの伝搬性状に関する研究
建築音響に関する研究
クメール宗教建築に関する研究
主な担当授業科目
自主創造の基礎１、建築概論、建築環境工学Ⅰ、建築実験Ⅱ

出身地　神奈川県横浜市
趣　味　ギター演奏、ガムラン演奏、陶磁器収集

ふじもと　としあき
藤本 利昭

部屋　11-108
研究テーマ
各種合成構造の耐震性能に関する研究
既存建物の耐震性能評価手法に関する研究

主な担当授業科目
自主創造の基礎２、建築応用力学、建築応用力学演習、

出身地　東京都
趣　味　旅行、ゴルフ

ひろた　なおゆき
廣田 直行

部屋　5-313
研究テーマ
施設オープン化の方法論
コミュニティ施設再編の計画論
公的ストック空間の再利用計画

主な担当授業科目
建築計画Ⅰ、施設計画、建築設計Ⅱ・Ⅳ、総合設計

出身地　北海道札幌市
趣　味　コーヒーとお酒と温泉と

もろはし　のりたか
師橋 憲貴

部屋　11-103
研究テーマ
再生骨材コンクリートを用いた重ね継手の付着割裂性状に関する研究

主な担当授業科目
自主創造の基礎２、建築概論、建築構造力学Ⅰ、建築構造力学Ⅰ演習、鉄筋コンクリート構造、鉄筋コンクリート構造演習、総合設計、プロジェクト演習、地球環境学

出身地　福島県郡山市
趣　味　お出掛け

ゆあさ　のぼる
湯浅　昇

部屋　5-204
研究テーマ
表層コンクリートの品質に関する研究
RC 造の耐久性に関する研究
RC 造の非破壊試験方法の開発
仕上材料の劣化・不具合に関する研究
RC 造の解体技術に関する研究
主な担当授業科目
自主創造の基礎２、建築概論、建築材料Ⅰ、建築維持保全、建築実験Ⅱ、建築材料科学、地球環境学
出身地　札幌生まれ新潟育ち
趣　味　鮭釣り

わたなべ　やすし
渡辺　康　　**（居住空間デザインコース）**

部屋　4-302
研究テーマ
建築環境における様々な関係と建築言語
住環境（住宅/集合住宅/街まで）における人の関係

主な担当授業科目
自主創造の基礎１、集合住宅論、建築設計Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ、総合設計

出身地　東京都
趣　味　様々な音楽や現代美術や空間や街を体験すること

■ 准教授

（居住空間デザインコース）

亀井 靖子（かめい やすこ）

部屋　4-404

研究テーマ

郊外戸建建売住宅団地の維持管理・保全
Docomomo Japan 選定建築の評価と継承
公共空間の保全・維持管理

主な担当授業科目

自主創造の基礎１、建築設計Ⅰ

出身地　東京都
趣　味　散歩、旅行、国際交流、茶道

下村 修一（しもむら しゅういち）

部屋　5-303

研究テーマ

地盤の液状化特性、地下構造物構築技術
地盤調査技術、地盤改良技術

主な担当授業科目

自主創造の基礎２、地盤工学、建築構造力学Ⅰ・Ⅱ、建築構造力学Ⅰ・Ⅱ演習、建築実験Ⅱ、総合設計、建築構造デザイン

出身地　千葉県
趣　味　ジョギング

篠崎 健一（しのざき けんいち）

部屋　4-206

研究テーマ

意匠設計・建築デザイン　空間図式の探究
人にとり建築すること住まうこととは何か，人は己の生きる環境を如何に形成し，空間に己を定位するのかを探究している。

主な担当授業科目

自主創造の基礎１、建築計画Ⅱ、デザイン論、エクステリアデザイン、建築設計Ⅲ・Ⅴ（建築デザインコース）

出身地　阿佐ヶ谷　（東京都杉並区）
趣　味　音楽、美術、フットボール

永井 香織（ながい かおり）

部屋　5-205

研究テーマ

歴史的建造物の仕上材料調査
超高層建築物の改修工事に関する調査
レーザの建設分野への応用研究
仕上材料の見え方・色彩の研究

主な担当授業科目

自主創造の基礎１、建築材料Ⅱ、建築実験Ⅰ、技術者倫理、建築施工Ⅱ

出身地　東京都
趣　味　茶道、ジョギング、ホットヨガ

みかみ　こうせい
三上 功生

部屋　5-209
研究テーマ
障がい者・高齢者などの温熱環境のバリアフリー化に関する研究、

主な担当授業科目
自主創造の基礎１、建築設備Ⅰ、建築実験Ⅰ、建築維持保全、総合設計、地球環境学

出身地　千葉県我孫子市
趣　味　サッカー、ドライブ、飛行機模型収集、映画鑑賞

やまぎし　てるき
山岸　輝樹

部屋　5-312
研究テーマ
郊外における地域施設の再生・再編に関する研究
新しい混合型の住宅・住宅地計画に関する研究
主な担当授業科目
自主創造の基礎２、一般構法
建築設計Ⅰ・Ⅱ・Ⅴ、キャリアデザイン、キャリアデザイン演習、総合設計
出身地　新潟県新潟市
趣　味　料理、旅行

■　専任講師

かまだ　たかひさ
鎌田 貴久

部屋　4-202
研究テーマ
接合部の履歴特性と建築物の履歴特性に関する研究
CLT を利用した構造物に関する研究

主な担当授業科目
自主創造の基礎２、建築構造力学Ⅰ、建築構造力学Ⅰ演習、木質構造、建築実験Ⅰ、特別設計Ⅰ、総合設計、建築構造デザイン

出身地　鹿児島県
趣　味　釣

■　助教

みずの　りょうこ
水野 僚子

部屋　6-201
研究テーマ
近代日本住宅史
近代建築技術史

主な担当授業科目
自主創造の基礎１・２、建築設計Ⅰ、建築史Ⅰ
出身地　茨城県取手市
趣　味　旅行、読書

■客員教授

いずみ　こうすけ
泉　幸甫

研究テーマ
建築計画
（集合住宅における多様化手法の研究）

出身地　熊本県八代市

趣　味　一番が建築、次に勉強、そしてお酒、最後に幸せな睡眠、特に朝の二度寝が大好き

ふの　しゅうじ
布野　修司

部屋　5-314
研究テーマ
地域生活空間計画に関する方法論的研究
地域の生態系に基づく居住システムに関する研究
アジアの都市組織に関する比較研究
主な担当授業科目
建築史特講、建築計画演習Ⅰ、建築設計特別演習Ⅱ

出身地　島根県出雲市
趣　味　サッカー、映画

■ 非常勤講師（2020 年度）

あそう　たかし
麻生　孝
いしい　まさお
石井　政雄
いずみ　としや
泉　俊哉
いのうえ　ひろあき
井上　博明
おおつか　やすこ
大塚　泰子
おかもと　まさる
岡本　賢
おのだ　たまき
小野田　環
かわしま　あきら
川島　晃
こじま　ひろゆき
小島　広行
さいとう　ゆわ
齋藤　由和
さかき　よりひこ
榊　頼彦
しらはま　まこと
白浜　誠
すなだ　てつまさ
砂田　哲正
せと　けんじ
瀬戸　健似
たどころ　しんのすけ
田所　辰之助
たなべ　ひかる
田邊　曜
ながおか　べん
長岡　勉
ながおき　みつる
長沖　充
ながせ　こういち
長瀬　公一
なかむら　ゆきこ
中村　友紀子
なべしま　ちえ
鍋島　千恵
はましま　かずなり
浜島　一成
ひろたに　じゅんこ
廣谷　純子
ほそや　いさお
細谷　功
まえだ　けいすけ
前田　啓介
まつみや　あやこ
松宮　綾子
まるの　あやこ
丸野　綾子
もり　きよとし
森　清敏
もりやま
森山　ちはる
やまだ　よしひろ
山田　祥裕
やまなか　ゆういちろう
山中　祐一郎
わだ　なつこ
和田　夏子
わたなべ　のりお
渡邊　詞男

大学院
かわしま　あきら
川島　晃
はしもと　ろくろう
橋本　緑郎
よしの　やすこ
吉野　泰子

■ 建築事務室

新井（あらい） 良美（よしみ）

部屋　4-101
出身地　千葉県千葉市
趣　味　スポーツ観戦

田原（たはら）　あゆ子

部屋　4-101
出身地　千葉県千葉市
趣　味　映画鑑賞

04***(145**)(248**)